

古史傳

自第百六段
至第百十二段

廿一

120

東 京 國 立 書 館

和書門

國史類

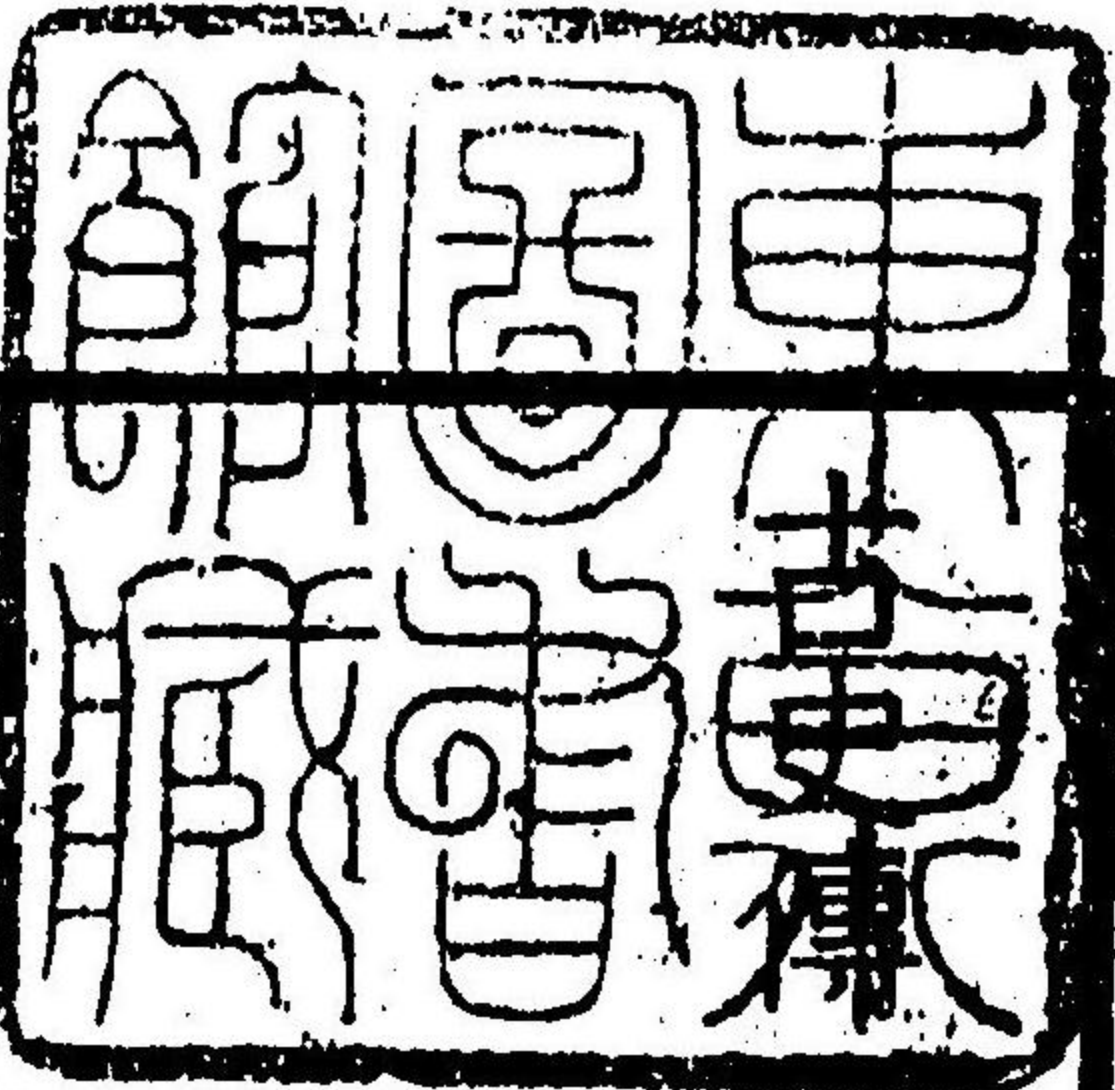
二八函

一架

號

一冊

128
36
3



二十一出卷

平篤胤謹撰

男 鐵胤
孫 延胤

續攷

神代下 出卷

六百

天照大御神出命以而豐葦原

千秋長五百秋出水穗圀者我

御子正哉吾勝勝速日天忍穗

耳命出可知。因也。言依賜而天
降給矣。於是天忍穗耳命。於天
浮橋。多多志而臨睨。出詔曰。彼
地者未平矣。伊多久佐夜藝而
在矣。伊那加夫斯。凶目杵。因歟

詔出而更還上而請給。天照大
御神矣。爾高皇產靈神。天照大
原神。集八百万神。集而於天思
兼神。令思而神議。議曰。此葦原

ナカツクニハアガニコノベキシラスクニトコトヨサレ
中囿者。我御子出可知囿。言依
タマヘルクニナリカレニカノクニキハヤブル
所賜出囿也。故於彼囿。道速振
アラブルクニツカミナスホタルカヤクカミアレキカミドモサハニ
荒振囿神。如螢光神。邪神等多
アリテイハネキネタチクサノカキハモゴトヨクコト
在而磐根木株。草片葉猶能言
ドフガヨルハモコロホベノニガトナヒソラヒルハ
語。夜者若火瓮而喧響出。晝者

ナシサバヘテワキアグソラマツツカハレイツレノカミヲテカ
如狹蠅而沸騰出。先遣誰神而。
マシコトムケソノアレキモノヲトノリタマヒキコ、ニガモヒカネノ
將言趣其邪鬼也。詔矣。爾思兼
カミマタヤホヨロツノカミタチミナハカリマラサクアノ
神。及八百万神等皆議白出。天
ホヒノミコトハスグレタルカミナリコレテムツカハレトマラシ
穗日命者傑神也。是可遣也。白
キカレツカハレアノホヒノミコトヲツバヤガテコビツキガホ
矣。故遣天穗日命則。乃媚附大

クニヌレノカミニテナルニテミトセニザリカヘリゴトマラサキカレ
因主神而。至三年不復奏矣。故

マタツカハスソノコタケミクマノウレヲ
復遣其子武三熊出大人。亦云

クマノミコトマタノミカハオホセ
熊命。亦名大背飯三熊出大人。

マタノミカハイナセハギノミコトマタノミカハアノトリフネノミコト
亦名稻背脛命。亦名天鳥船命。

コノカミモシタガヒソノチノコトニテカヘリゴトザリ
此神亦順其父出事而。返言不

マラサキ
申矣。

豊葦原。葦原此事は既ふ上り出と也。第九十一段。此ふ豊

てふ言れ添とるを。師説の如く。始て御子命よ事依賜ふ

詔れまば祝てあ也。豊を因へ係る祝辞也。○千秋長五

百秋。師云あを大殿祭祝詞よ。万千秋乃長秋爾大八洲豊

葦原瑞穂之因乎。安因止平氣久所知食止言寄奉賜比氏。

とあるを照して思ふ。長字ハ下子おけける。那賀伊富

秋を訓べし。上子付て千秋長と訓を己ろし。はと舊事紀

添とるひぐ。よ。五百秋長と。今一長字あるを。さくしらよ

こせあり。上も千秋之を之を添て調宜く讀べし。大嘗

祭詞よ。天都御食乃長御食能遠御食登皇御孫命乃。大嘗

爾平久安久聞食氏豐明爾明坐牟皇御孫命能云々也

何也。書紀よ千五百秋とあり。ちて神武天皇紀の始よ

凡て神代此事も世々を壽詞と為給へるを如何云ふ

語を以て傳へしれり。譬へば雅言よ八百代れぞ云を

今俗言よ千秋万歳と云ふ。こまめ細よ云。だ八百

意を全同きバ。如し。但し神武天皇紀の始よ出とる神代

○水穗因師云水は借字よてみぢくし。此を云ふ。書紀

字を非に迷ふことを勿と。穗を稻穂と云ふ。上よ葦原云と

と勿思ひ。末よ大御神の御言よ。齋庭之穗とあはも然也。

故古より此一字を伊那煩と訓來。於ちまぎ因号の水穗

も伊祢といを直よ。雷をい牙む。此も然訓むべきなり。

はて水穗因と云號も。此齋庭之穗よ由縁ある事也。猶

下此登由宇氣神の處よ委く云はし。そのもの物め事も異因

因と優まる中よも。稽を殊よ。今よ至るまで。万因よ卓

れて美き。神代より。淡き所由あは。ことぞ。今世諸人か

賜る美は。御因よ。生えて。か。依。免。で。此。稻。穂。を。朝。暮。は。他

因の事を此み思ひあ。はて上よ。千秋長五百秋也云も。此

水穗よ係よ。依祝辭よ。秋と云ふも。穗よ。長く久えく。御

子命此水穗を所聞食はき因。云ふ意以て名けよ。依因

號れるよと。彼大嘗祭祀詞よ。此同祝辭を。美麻命此大嘗

聞食はこをよ。係て云。依よても知はべし。詞も云ひ。ざ万

は替よ。瑞穗へ係ま。り。○我御子之可知因也。此時しも

葦原中囿を八千矛神の大囿主と治御坐シ間マあるよ。大御神のかく詔ミコトノコトふことは幽契ユキケある事コトふれむ有アら。其ソノをまぢ伊邪那岐大神大御體オホミミ此穢ケガレを禊スガフ竟マデ給タマフへ依ヨ時トキふ。大御神と須佐之男命スサノヲノミコノミコトと生坐ナマシしうば此二柱ニハしらを宇豆御子ウヅミミコと詔ミコトノコトひて。大御神よ。高天原を事依コトヨサシ賜タマフひ須佐之男神スサノヲノミカミよ。青海原ウミノハラ津ツ之ノ八百重ヤチハチ我ワ所知シラセと言イハ依ヨし賜タマフへ。青海原津之八百重とを。此囿土全ミチをいふ古言コトよて。即チ天下ヤマトを知看シラセせと詔ミコトノコトふ御依ミコトヨサシあるを。此事コトハ第廿九段の須佐之男命スサノヲノミコノミコトを御母ミカド此坐ココひ豫美ヨミ囿ミ牙ノ往坐イデさで。得有エらぬ幽契ユキケあてて。御父ミカド大神オホカミふ白シラセして御許ミコトヨサシを蒙カケて彼囿コノミチへ往坐イデひ事コトと成ナぬるが。

此事コトハ第三十段の姉命イメノミコト天照大御神アマテラスノミカミよ。御暇ミカドノヒマ請イダシし給タマフをむ傳ツタは委マカく註ツケへり。高天原タカマハラよ參昇マキノボリ坐イデして大御神オホミカミと御誓ミカドノチカガヒの間マ御子ミコ生給ウミひ。後ノチ御荒ミカドノアラび有アら依頃ヨシトキまで。荒御魂アラミタマ此コノみ進マシて。御父ミカド大神オホカミの天下ヤマト治看シラセせむ御詔ミコトノコト畏オソしとも所思オモホシ看ミさ然シ狀サマあるを。第二十二段と第四十三段まで此趣コトを見て知シべし。千座置戸チサエシの祓ハラヘを負オシひ。祓ハラヘ竟マデ給タマフへ依ヨ後ノチを。其ソノ驗シトシよ依ヨて。和御魂ニギミタマ此コノ幸サキひて。稍ヤくふ伊邪那岐大神イセナギノミカミの青海原津之八百重ウミノハラツノヤチハチを治看シラセせと詔ミコトノコト牙ノ依ヨ時トキふ。吾ワが清心スガココロを以モて生ナる兒等コドモハ。姉イメ再度フタビ參上マキノボリ給タマフへ依ヨ時トキふ。吾ワが清心スガココロを以モて生ナる兒等コドモハ。姉イメ命ミコトふ奉タマフると白シラセ給タマフひ。天アメ忍穗耳命ニギハヤヒノミコト天アメ穗日命ニギハヤヒノミコト天津アマノ天照大御アマテラスノミカミ

神加の三柱女神を須佐之男命スサノヲノミコノミコトに授けて。多紀理毘賣命タキノリヒメノミコト、

岐都比賣命ヒメノミコト、汝三神を道中へ降して。皇美麻命スメマノミコトを助奉れ

を詔へるは。後よ皇美麻命を天降給むの御心あて。

詔牙流御言あるを彼段に註る如く。此第六十三段第

六十四段を彼時ふや。二柱議給ひて。御父伊邪那岐大神

此御事依を果さむと定給へむ。猶言は須佐之男

して還渡坐し。韓國島を金銀あり。吾御子の治看に因よ

浮室有らば。佳らじと詔へる。後よ韓を征せ奉て給

仲哀天皇此御世よ大御神此御誨坐て。征しめ給へる事

は既く二柱神の御誓此中よ坐る御子此御國を治

看に主とよ定れ。依状あること。まよ須佐之男大神の

國を去し。皇美麻命よ讓奉し。免給むの御心ある

こと。第八十六段よ。故是を以て大御神の今かく詔牙流

ぬ流る。ちて日神の和きは天日此御國よ月神の荒

神との御誓此中よ坐る御子此天下を永く抑神代

所知看にこと。又波き所以あはべき事ふこそ。抑神代

此初よ。如此幽契あて。所知看し來る天皇此天日

嗣ふし坐ませば。天地此共堅石常石よ。動き坐さば移ひ

坐さぬも道理あり。師説と甚く異あり。言依賜而の

賜は只崇辭ぬ。國を賜とふは非び。さて此よ忍穗耳命

を高御座よ。即け給へ。依事を云はき。無きを脱と依あ

て。命の処見合はべし。藝。○天降師云あ。は阿麻久陀志

を訓はし。天照大御神の詔命以て令降とまふ故あ。久

志^レ令^レ降^ルあり。○天、浮橋^ニたは^シ天、磐船^トとも云^テて。天と地を此間を神等^ニ此通^カ給^フ時^ニ。乘^リ給^フ物^ナあり。委^クテ第百卅七段の傳^ニ註^ヲを見^ベし。

○多^ク志^シ而^テ。浮橋^ニ乘^テ發^セ由^ルれり。此^ノ事^ヲめ第百三十七段^ニ註^スふ

○臨^ル睨^ル。舊^ク富^ホ是^レ理^リと訓^ルる^ニ依^マす。或^ハ說^フ小^ノ強^ク視^ス依^ヲを云^フとい^フ牙^ニ。今^ノ俗^ニ人^ハ此^ノ隱^カ事^ヲあ^トを探^サ露^セレ^バ。或^ハ富^ホ是^レ流^ルを云^フ是^レあ^ハ依^ルべ^シ。○未^ダ平^ハ。伊^ハ麻^ニ陀^志豆^麻良^受と訓^ベし。○伊^ハ多^ク久^ク。師^云痛^クふ。万^ノ葉^ノ多^ク此^ノ字^ヲを書^リ。ま^ニ甚^ク字^ヲ疾^ク字^ヲあ^トをも書^レ死^ス。七^ノ卷^ノも大^トも有^ルゆ。は^ト伊^ハ多^クと此^ノみ^も云^フ。允^恭天^皇卷^輕太^子此^ノ御^歌。伊^ハ多^ク那^加婆^をあ^ル是^レあ^ルゆ。痛^ク泣^ク者^ナあり。は^ト万^ノ葉^ノ。伊^ハ刀^を云^フも。痛^ク。

字^甚字^ヲを書^テ同意^{あり}。但^シ語^ノあ^ルぎ^ハ依^テ伊^ハ多^ク久^クとは異^カあ^ルま^今ノ人^ハ其^ノ別^ヲを知^ラず。漫^クふ。○佐^ハ夜^ハ藝^ハ而^テ在^ル矣[。]而^ハ矣^ハも^ト氏^ノ理^ヲを改^メあ^ルゆ。師^云神^武天^皇卷^ノも此^ノ言^ハあ^ル。

は^ト同^ク卷^ノ伊^ハ須^氣余^理比^賣命^ノ御^歌。加^ハ是^レ布^加牟^登曾^許能^波佐^夜牙^流万^ノ葉^二。小^ノ竹^ノ之^ノ葉^者。三^ノ山^毛清^爾亂^友。小^ノ竹^ノ之^ノ葉^云く^ハ風^トい^ハは[。]は^ト六^ノ。御^山毛^清落^多藝^都。共^ニ清^ハ借^字あ^テ。佐^夜具^貝を云^フあり。古^今集^小甲^斐根^をさ^ヤル^も見^シが^あど^云る^ハ。さ^ヤル^別意^{あり}。古^今集^小竹^之葉^ノの^さや^ぐ霜^夜を。頭^昭注^ス。

う^ある^ハ夜^ハれ^ゆと云^フ。依^テ誤^ルあ^ル後^ハ此^ノ歌[。]あ^トあ^ル如^ク。物^小毛^霜さ^やぐ^あぞ^誤。伊^ハ多^ク久^クは[。]多^クし。あ^トあ^ル如^ク。物^此音^ノの^喧し^く騒^シ死^事れ[。]伊^ハ多^ク久^クは[。]神^多在^ルと^ある^ハ。是^レあ^ル。れ[。]

彼知よ。儲かく在矣と詔牙依也。天浮橋と也。此囿の状を
聞免志視そ丸はして痛喧擾て在り依よふと。歎き給牙
依御辭ふ也。伊豆山縁起よ。彼山を天忍穗耳命の始めて
天降坐る地と傳ふること信あらバ此時あ
るべき事第九十二段の○伊那加夫斯也。本よ不須也。頗
傳よ云。るを見依べし。○伊那加夫斯也。傾也と書て訓
註。此云。伊那歌。志とあり。字を
よくも當らぬ。假字よ加き於。伊那ハ否よて。今言ふ
伊夜と云ふ同きよと既ふい牙也。第十九段の傳。伊那志
許米伎此下見べし。
加夫斯ハ上の八千矛神此御歌よ。宇那加夫斯とある加
夫斯と同く。傾ふて御頭を傾けて。否と所思せ依状あ也。
今世人も否と云う也。必頭を振傾くる事依依其を頭振
といふ是あ也。記傳よ。頗傾とを。固いまど成堅まらぬし
て。傾なる処あ也。しを云ありと解れぬま

ぎ信ガ ○凶目杵のまを也。既よ云へ也。是も第十九段
の傳を見べし。○
更を請牙加らて見せし。○高皇産靈神。天照大御神之命
以云く。師説よ。凡てかく依詔命を云ふ。此二柱神を如此
く列祗舉とる處も有也。はと天照大御神を先よ。高皇産
靈神を次小舉多依處もあり。まよ高皇産靈神を略て。
あ。天照大御神此みを舉と依處もあ依也。天照大御神
は表よして。高皇産靈神ハ裏あるが如くあまバれぬ。然
云故也。高皇産靈神也。高天原を所知食以君主よ也。坐ま
さび。故裏あるが如し。此神を次よも列
ぬまよとを畧きもせるも。此故あり。天照大御神ぞ。伊
邪那岐大神の詔命ふとゆて。始て高天原を所知食以君

主よ坐して。故この大御神ぞ、天皇の其天津日嗣を傳り

て。御子命を天降奉り給むと云。依時此詔命おまむあ

り。故表あるが如し。此大御神を先よもあげまよ一柱の

産靈神々のみ奉て。此大御神の詔ふ。然有ども高皇産

靈神は、天地此初發の時と云。高天原よ成坐て。故此神を

世よ所有る物も事め生成を悉く此神の産靈此功德

小と依が故よ。今如此る詔命をも相並びて詔し。然るを

外家の羽翼とやうよのこ説おせるを。例の漢意を此み

思ひて。吾皇神此道を知ざるものぞ。凡て書紀此諸註此

こと。皆鹿畧あり。はよ皇美麻命此遠皇祖とも崇奉給

ふれり。是まよ皇祖と云るも裏あるが如し。ちて此神を

皇御麻命の皇祖を申出をもあよ外祖父よ坐

故とのみ思ふも。産靈此義を知ざるあり。万物も事も。此

産靈とり成生む。此神を皇美麻命の皇祖ある此よ。非

ば。凡て万姓万物万事の御祖よ坐まよあり。天照大御神

を然らば。多皇美麻命此顯皇祖よ坐。外此。けち。絶を

とく辨へ。書紀此諸註よ。右此意を得とるも此。一も無き

奉る。は如何ぞめ。のみ。迷へる故あり。を言れ。多依よ就て。猶

委く考。依よ。皇美麻命御天降の事此起。右よ云。如く天

照大御神と。須佐之男大神と御議坐て。早く定賜へ依事

小し有を。此よ始て。天照大御神此御心と詔ひ出て。此後

は專と。高皇産靈神の執行給ひて。調子る事よあむ有け

依。然るを神代紀正書よ。初小天照大御神之命。以と云こ

と。あく。始終と。布りて。高皇産靈等御外祖父坐よ。と

思て。特よ瓊々杵杵を愛して。葦原中国の主よせむと所

あとの始、大御神の詔命あらば、得有まじき幽契ある事
あるをや、まゝと第一一書に、初は天照大神勅、天稚彦曰云
云、有て高皇產靈神、ハ一、所もれし、此も非傳あり、凡て
此、御天降、此事を、天照大御神の御命より起て、高皇產
靈神の事、執給へる趣ある。其を次く、此事議おち給ふ
古事記に、旨ぞ正る趣あり。時、二柱並びて御坐おくも、科おけ計ひ給ふ、あとは高
皇產靈神、お坐こせ、明お見えと、猶下お註を見せし。○
神集く而、師云、上も此、同語有し、其處の集は、都度比と
訓、此ハ都度幣と訓べし、大命以令集お。都度幣ハ、都
世を切て幣と云あり、上も有し、方葉二、久堅之、天河原
集、自集あり、故、都度比と訓お。爾、八百方、神集く座、而神分く之時、爾、此集を、岡
麻理と訓ましは誤あり、古事記、大祓詞、高天原、爾神留坐、
記、都度比と訓、注ある、なや、

皇親神、漏岐神、漏美乃命、以氏、八百方神等乎。神集く賜比。
神議く賜氏、おどあ。今云、神留のおと、第九十九段、鎮
座、此下、注へり、神漏岐神、漏美乃命、
もと、高皇產靈神、皇產靈神の御事を申せども、此は天
照大御神、高皇產靈神を申せり、此事を第一、段の傳よ、委
く、注へり、け、て師説よ、上、皇親と置る、皇は、天皇を申、
凡て、須賣良賀云くと云、こ、皇親と置る、皇は、天皇を申、
於、ま、し、死を云、天照大御神、高皇產靈神、共、お、皇美、麻、命、の
御祖、よ、坐、せ、む、親、し、き、由、あり、け、て、此、を、世、お、皇親、と、於、ら
祓、て、誦、慣、へ、る、は、宜、う、ら、ぶ、皇、を、離、し、て、親、神、漏、岐、を、於、ら
け、誦、へ、し、彼、孝、德、天、皇、紀、よ、我、親、神、祖、と、詔、ひ、出、雲、神、賀、よ
も、親、神、魯、伎、と、云、る、な、ま、ま、此、親、ハ、○、今、思、而、神、議、く、曰、
次、ある、神、漏、美、へ、も、か、く、る、詞、あり、
おは、先、思、を、免、て、後、よ、議、曰、と、云、こ、空、聞、ゆ、免、れ、ど、然、お
を、非、安、思、は、し、米、む、ぐ、爲、ふ、集、予、給、ひ、て、議、給、ふ、お。本、よ
思、而、詔、と、ある、を、上、よ、大、祓、け、て、神、議、く、お、は、甚、切、小、議、賜
詞、よ、依、て、神、議、く、曰、と、お、於、

ふを云ふとあゆ由を既よ云ふ。第四十四段神集の
此葦原中囿アヒハラナカウヱを高天原タカマノハラにして詔ふれまむ。彼を有はき
を此とあるは。師ハ古の、此格あり中昔の源氏物語あ
多ウリセ云タウリセ云天地初發アメノチノハツキ此時よ。天神の御言よ。是漂在囿ウヱノと
詔言ミコトノコトあゆふ云る如く。高天原タカマノハラに御門ミカド推張オウサヘし視ミそれをし
て。此と指詔サシミコトへあゆ御言ミコトノコトあり。其を此時あかいまど天地の
間の。然しも遠くは離ワカぢゆし加バれ也。凡オノ第五段此傳
儲下サテよ彼囿ウヱと書カケあゆ。神代紀カムヤマトノヒメノコトよ。彼地ウヱノチとあゆふ依ヨます也。○
我御子ミカドノミコ之可知シカシメ囿言ウヱノコト依所賜ヨシタマハレ之囿也ウヱノコト。あは御言ミコトノコトを熟思ユクシふは
し。二柱相竝フタツツナヒばして。天安河原テンアンカワハラに御坐ミカドし。八百万神ヤチマンノカミを集ツクし

免給メナシあゆむ。二柱の大詔命オホノミコトノミコトあることをは著ルるまど。此御言
は。前サキの大御神オホノミカドに御詔ミコトノコトを承ウケて詔言ミコトノコトあゆ。高皇產靈タカミムスヒ神の御言
あゆこと。論コトあきをや。天神本紀アメノカミノキよ。高皇產靈タカミムスヒ等召集メカケ八百
神カミ以シテ天照大神アマテラス詔ミコトノコト曰イハレ此葦原中囿アヒハラナカウヱ者我御子ミカドノミコ可知シカシメ之囿ウヱノコト。凡オノて
詔賜ミコトノコトヲタマフ之囿也ウヱノコトとあるを。とく此旨コトノサシを得ユクとる書狀カキモノあり。凡オノて
此御天降ミコトノアメノの件コトを。かき見もて行ユキゑらむ。あは。二柱神の御
名ナを竝舉ツナヒアゲとあゆも。其御舉ミコトノコトヲアゲ御詔ミコトノコトともよ。二方フタタチよ別ワカる。あは。最
明アキラカふ知られぬ。○道速振ミチノハヤシを。万葉二十マンヤフ。知波夜夫流神チハヤフノカミ
乎許登牟氣コトノサシとあゆふ依ヨて訓コトべし。師云ウチノカミ知チてふ言コトよ。道ミチ字
と知チあるを。美知ミチといふ。冠辭考カウジノコトよ。こを伊知波夜夫流神チハヤフノカミ
は御道ミチノカミと云イハレこをあり。冠辭考カウジノコトよ。こを伊知波夜夫流神チハヤフノカミ
てふ語コトあゆむ。伊字略チノジノリヤクきて云イハレあゆふ。崇タカはしく荒アラき神と

云意あす。

古事記よ。道速振荒振。因神とある同じ事を神代紀よ。残賊強暴横悪之神を書とる。相對牙

て知。古事記よ。道速振と書るを借字。神代紀よ。残賊強暴とけり。義を以て書とり。ちて伊知

波夜の伊知。伊都と音通ひ。強き勢をいふ。故。日本

紀よ。伊都よ。稜威の字を書。今云。倭姫命。世紀よ。伊豆速

を清く。明き義。伊都を猛き義と。二よ。解れ。波夜は俗よ。まど。然らび。其由ハ。第十五段よ。既ふ云。りき。

氣の速き氣の去。ゆと。死。れと云。即。あまふ。依て。心。膽の

疾。をげ。あ。く。崇。は。し。き。を。知。波。夜。夫。流。と。云。こ。と。灼。し。且。そ

此。夫。流。を。辭。よ。て。神。佐。備。神。さ。ぶ。る。宮。ひ。宮。ふ。す。夷。び。夷。夫

利。ふ。ど。の。夫。利。ふ。同。じ。く。其。有。状。を。云。あ。ゆ。や。あ。ゆ。此。を。冠

委。く。を。彼。考。よ。就。て。見。る。べ。し。○。荒。振。を。打。聞。え。と。依。ま。く

あす。

後拾遺集神祇部よ。藤原長能。今をり。をあらぶ。心。ま。し。ゆ。に。あ。花。の。都。小。社。さ。あ。め。あ。は。紫。野。今。宮。を。

始めて祝する時。○。因神とは。高天原。ふして。詔ふ。故。よ。別

て。如。是。詔。ふ。あ。す。○。如。螢。光。神。云。く。釋。紀。よ。威。光。如。螢。火。也

ぞ。云。ゆ。が。如。く。正。し。死。神。等。此。御。光。い。み。じ。死。ふ。比。び。て。邪

神の光。此。卑。し。き。を。云。あ。す。和。名。抄。よ。兼。名。苑。云。螢。亦。作。腹。

下。盛。光。腐。草。成。之。和。名。保。太。流。と。い。ふ。字。鏡。小。も。蟬。螢。保。太。留。と。見。え。と。り。扶

木。集。ふ。葦。原。や。螢。か。ぐ。や。く。神。ま。で。も。飛。散。る。ば。う。す。祓。ひ

棄。る。す。○。多。在。而。之。佐。波。爾。阿。理。氏。と。訓。べ。し。○。磐。根。を。師

云。多。磐。ふ。て。根。は。添。と。言。あ。す。屋。を。屋。根。羽。を。羽。根。杵

を。杵。根。を。杵。根。嶋。を。嶋。根。と。云。類。れ。ぬ。祝。詞。考。よ。岩。の。高。く。頭。れ。と。る。を。岩

木といひ、濃く土よあるを岩根云、言まるとるをころし。○木株を紀禰多知と訓む。前よ許陀知と訓し。其を師云。大殿祭祝詞よ。木根乃立知とゐる乃は。決て行あす。乃といふ辞有てハ。調もいと。非ちて他此祝詞よ。みあ木立や有まぜも。許陀知と訓ては叶えび。是を常云ふ木立の事尔を非。祝詞考の説此如く。枉あす。今云。字鏡よ。枉支。然まば根。字あゆよ依て。訓ばき形ゆ。木株とゐゆも其意あす。株を字書ふ木。然らばあ。樹立木立れぞ書るといふと云よ。かの岩根屋根あどの例此如く。あ。木の事をも。根を添て木根とも云。故れ。さまむ木立あぞ書ゆ。木此一字残き。ねよ用

ひて書ゆ。て。屋の一字をも屋根。羽の一字をも波禰と訓ぐ如し。ちて意を木根立よて。諸あ。木字木根と云るは。古今集神樂採物の歌ふ。霜やとびたけど枯せぬ。柳葉此。あち榮もばき神此木根りも。せ云るれ。然るを後よ。心得て。と免る歌ありて。人よあ。現巫のこせ。心得とる。はいみじき非。ことあり。神の歌よ。現巫を詠べき由あ。まよ。現巫を立榮もせ。云べき物。万葉一よ。岡の草根をいざむ。びて。れ。十四よ。久佐祢可利曾氣。こまらも。む。あ。と云。苺とい。牙ま。あ。草を草根とよ。免る。○草あり。木を木根云。こと。準。て思ひ定むべし。○草片葉を。久佐乃加伎波を訓べし。書紀よ。草葉とあま。と。田風神祭祝詞よ。草片葉とあ。師云。草を大の。三葉五。今。風神祭祝詞よ。とれり。師云。草を大の。三葉五。葉。れど。並びて。生ゆ物あ。る。其を闕取て。あ。い。ち

ちうれ一葉はてもと云、れるべし。書紀ふた。と。草葉と
有きどぬ。其の例の漢文ざはふ約めて書れるはれ也。此
を加夜を訓むハ非あ也。加夜と。○猶能言語を用久許登
は屋根をふく草をこそ云冠。○猶能言語を用久許登
登布賀基登と訓べし。万葉四ふ事不問木尚云く。五ふ許
等く波奴樹爾波安里等母あどあ也。あ不いと多くあり。
あどを見し事問を物言を云ふ同じ。凡て言を問と云る例
て知べし。事問を。師説を見し。ちて此を。道速振荒振神螢れ光く邪神の態
れ不他も有め。問放るれど云は是あ也。委くを垂仁天
師説を見し。ちて此を。道速振荒振神螢れ光く邪神の態
として事問を燃岩根木株草片葉ををら。能言語ふやう
ふ率ら志と由あり。下よ見えある天穗日命此返事ふ

は青水沫も事問子由見えと也。○若火瓮而は。火瓮を
火と書て。此云。褒倍とあるを。師説よ。富倍能母許呂瀨と
従ひ。神寿詞よと也。て改め於其を。富倍能母許呂瀨と
訓べし。師云火瓮を字此如く。瓮の内ふ焼く火あ也。若を
母許呂を訓る舊訓よ従へ也。万葉よも。麻都能氣乃奈美
多流美禮婆伊波妣等乃。和例乎美於久流等多く理也。母
己呂あぞあ也。凡て如若あどの字意此言御因よ三あり。
須を。師説此如く似あるは。基登久。三は母許呂あ也。那
言あるべく。母許呂の母を。加とる言よて。比あるべし。共
ふ同じ意。○喧響也。は。曾乎於登那比と訓べし。本よ喧響
むへれり。○喧響也。は。曾乎於登那比と訓べし。本よ喧響
あり。比と。史也。は。岩根木株草片葉をいふ。彼邪神等の其ふ
託て喧響立るとしあ也。○狹蠅ハ既よ出と也。第四十三
段此傳見

るば 〇沸騰也。曾袁和伎阿具と訓る。本ハ三字よ
と訓來 史也。此も岩根木株草片葉を云。沸騰るも邪神
此託てふ也。態あると。右も同じ。上も天忍穗耳命の御
詔をせるも。如此依状 言ふ。佐夜藝而在矣。と
を見それにしてあり。抑此時葦原中固也。尚かく荒振神
多く志て未平るは。何故ぞと云ふ。かの須佐之男命此御
荒びの時。始て荒發し神等此。謂も依狹蠅の沸が如
く。追矛と撥へぞ又集ては荒ふるよ。第四十三段。万物
六段。邪鬼の 其本を伊邪那岐大神の。豫母都固此穢惡ふ
下みるべし。觸給は依御服物ふ成ま依。水陸此邪神等此心よ。那も有
ける。第二十三段。此神さちの成まる。故陸も依を。岩根木
処よ註る事どもを。合考ふべし。

株草片葉をも喧ぐし。水飢るを。青水沫をも喧し。於是を
以て。建御雷神の。此邪神を攘平。巡行あるふ時。岐神を
嚮導と志て。巡行給へ。其を岐神を。豫母都固と起來
依妖鬼を。追放る有功神あまは。依神の功を。第二十
く。ま。此神を嚮導として。建御雷神此邪神を。攘平給る
事。第百二十三段。第百二十六段の傳を見。知べし。
〇將言趣ハ。師云。許登牟氣麻斯と訓べし。記中ふ多。此言
ふて。言向をもかけ。万葉二十。知波夜夫流神乎許等
牟氣とあ。言意を。許登は事。依事避お。の事を
同じ。牟氣は牟加世よ。加世を氣 背ける者を。此方子令
向意此言ふ。彼方へ向あり。平字を書て。牟氣と此み

め云コナタ。此方コナタ牙向タカ也。即歸服ケレタガ也。○傑神也也。本よ神之傑。

て師の訓コナタより依ス須具禮多留神那理タケルと訓ベシ。○遣ツク則ツク也。

師云都加波志都禮婆ツクと訓ベシ。賜倍志ツクと訓ベシ。此を岡部

翁ツク都加波志賜閉婆ツクを訓ベシ。皆非ツクあり。凡て遣志ツクの

下牙賜ツクといふ崇辭ツクを添ツクる例あり。此を四五百年前まで

は人皆ツクをく知ツクまツクし事ツクと見えて諸の文詞ツクは誤ツクれるを

一も無ツクをや。まツク都加波志ツクを云ツクべき処ツクを都加波佐ツクと

云ツクめ近世ツク人の非ツクあり。古ツクあることツクれツク都加波志ツクを遣人ツク

う牙ツクをりツク云ツク都加波佐ツク礼ツクを被遣ツクよツクて行人ツク此上ツクをりツク云言

あまツクを別ツクあツク凡ツクてかツク依言ツクぢツクひツクの格ツクを今ツクハツク媚附ツク

知ツクれる人ツクれツク文ツクのツクむ人ツクよく意得ツクべき物ツクぞ。○媚附ツク

を許ツク毘都伎ツクと訓ベシ。媚字ツク常ツクよめ許夫ツクと訓ベシ。字鏡ツクよも

無媚也ツク古夫ツクを見えツク靈異記ツクふもツク媚ツクコビツクをツク何ツク也ツク。詩經ツク大雅

無ツク為ツク夸ツク毘ツク注ツクよツク夸ツク毘ツク屈ツク己ツク卑ツク身ツク而ツク附ツク人ツク也ツクと云ツクひツク張ツク衡ツク南

都賦ツクふツク靈媚ツクと云ツクことツクもツクありツク。はツクとツク狐媚ツクをツク云ツクことツクもツク見えツク

とまツク右ツク何ツクまツクもツク遠ツクきツク字ツクよツクてツク聞ツクあツクまツクぬツク事ツクあツクまツクだツク其ツクを取ツクてツク此

方の言ツクふ用ツクふべきツク非ツク許ツク毘ツクをツク猶ツク古ツク言ツクありツクべツクしツク今ツク俗

言ツクふ物ツクり垢ツクあツクどのツク志ツクみツク著ツクてツク去ツクがツクときツクをツク許ツク毘ツク著ツクと云ツクも

是ツクふやツク○今ツク云ツク媚ツクをツク心ツク振ツクよツクてツク毘ツクをツク夫ツク理ツクのツク切ツクれツク依ツク言ツクあり

ことツク既ツクはツク第六十段ツク此ツク傳ツクふツク註ツクるツクがツク如ツクしツク斯ツクてツクそツク此ツク許ツクよツク疑

此意ツクあることツク○至三年ツクをツク師ツク云ツク美登世爾那留麻傳ツクと訓

云ツクもツク更ツクありツク。○至三年ツクをツク師ツク云ツク美登世爾那留麻傳ツクと訓

はツクしツク年ツクをツク常ツクよツクはツク登志ツクと云ツクをツク其ツク數ツクをツク云ツクはツク凡ツクてツク三登世

八登世ツクれツクどツク登世ツクやツクいツクふツク万葉五ツク伊都等世ツクあツクどツク何ツクめツク登

世は年經ツクありツクとツク切ツクれツクりツク穀ツク多ツク一度取收ツクるツクをツク一年經ツクやツク云ツク。

二度取收ツクむツクるツク城二年經ツクと云ツクれツク也ツク。故登世ツクとはツク其ツク經ツク數ツク

てツクあツクよツクえツク登志ツクと云ツクはツクてツク登志ツクと云ツク本ツク穀ツクを取收ツクるツク

を云ツクやツク云ツクこツクやツクハツク第七十四段ツク大年ツク神ツク此ツク下ツクのツク傳ツクふツク云ツクへツクめツク。

○不復奏矣ツクはツク師ツク云ツク加幣理言ツクとはツク使人ツク此ツク還ツクてツク申言ツクと云

意よて。加幣理を。其使ふ係る言あす。然るを今京返りありて後答歌返しと云故。加幣理言をも彼方の答言此意と思ふを達へり。漢文も復命と云復を。加幣返しと云も當れり。加幣理言此加幣理を。當らば。中昔の物語文あども。加幣理言を。加幣理とのみ云ひ。ま。御加幣理を。御を添て云る。加幣とは。違へる事あれども。是ら。後。轉りて。加幣志を。加幣理と。一。ふ。あ。れる。あり。万葉十九。平安早渡來而還事奏日爾云く。あ。ぞ。あ。す。○武三熊之大。人。亦云。健。あ。は。即。天穗日命。此御子。天夷鳥命。あ。る。あ。と。及。三熊命。あ。の。二。於。此。名義も。既。よ。註。す。す。第三十八段。○大背飯三熊也大人。亦名。稻背脛命。師説ふ。大背飯三熊也大人を。あ。依。神。を。天夷鳥命。と。同。神。と。聞。ゆる。よ。今云。祝詞考よ。を。固。は。と。以。熊野諸手船載稻背脛と。あ。依。三熊也。や。熊野と。

大背飯と稻背脛とよく似とす。と波岐を比。然れを本は一。神よて。天夷鳥命あす。む。む。傳。く。よ。て。様。く。ふ。轉。し。あ。依。は。し。と。有。す。猶この大背飯稻背脛鳥船三各の義を。○順。其父也事而云く。は。御父天穗日命。此大國主神。よ。婿。附。て。彼。神。の。御。心。を。取。給。ふ。事。ふ。順。ひ。共。く。よ。祐。て。其。事。を。謀。れる。故。り。此。も。返。言。申。け。ら。あ。す。然れども。御父子とも。て。然。る。よ。非。安。波。き。思。兼。を。免。ぐ。ら。し。て。大。國。主。神。を。和。し。静。め。大。八。島。國。の。現。事。頭。事。を。皇。美。麻。命。よ。事。ふ。く。避。奉。ら。せ。免。奉。り。給。む。と。よ。ぞ。有。ら。む。そ。は。下。第。百。十。四。段。よ。出。雲。國。造。が。神。壽。詞。小。依。て。文。を。成。し。其。処。ふ。委。く。註。せ。る。を。見。て。知。し。考。辨。ふ。

於是高皇產靈神更會諸神等

而問曰所遣葦原中國天穗日

命久不復奏亦使何神則吉爾

諸神僉白天津國玉神生子天

稚日子者壯士也宜遣出白矣

故於是天出加久弓天出加

久矢亦云天麻加古賜天稚日

子而遣出爾天稚日子亦不忠

誠降到其國而即娶大國主神

出女下照比賣因畱住

テ イロ アレ オモフトヲサメトコノ クニヲ テ ナルニテヤ トセニガリ
而云吾欲馭此國而。至八年不

カヘリゴトマラサキ
復奏矣。

更會諸神等而問曰古事記イテ天照大御神の御名も出
とゆを。今は書紀ふ。高皇產靈神此御名此み出とゆよ依
まる由は前段よ云る如く。此御舉也。大御神此御心と
起れゆ事ふ有まじ。高皇產靈神此專と執行給へむ
也。○使何神則吉也。何神乎遣志氏婆延祁牟を訓はし。
は多良婆と云。師云吉ハ。天智天皇紀童謡よ。奈爾能都底
意の古言あり。

舉騰多拖尼也曳雞武とあるよ依て延祁牟とは訓也。古
吉を延也云る例多し。雄畧天皇卷の大御歌よ。吉野をも
云ふ。はと余祁牟と訓まむも惡からば。只同じおせぬ。
余祁牟ハ。余加良牟也云ふ同く。有らむ行けむあど常
古を此格いぞ多加ゆ。今京よぬ也。何よき御有よ
むまよ涙の瀧也何ま高。○諸神僉白古事記。此の諸神
此中よ思金神あまき。今は書紀ふ。此神の無ふ依れ也。然
ゆ。天稚日子の忠あらぬを思多よ。思金神此思慮よ。え
非じと所思まむれ也。○天津國玉神。何神此御子と云こ
ぞ知はのら。師云。名義いづれる所以とも難知らまじ。

推て云はく。此神往昔葦原中囡^{クニ}降居て。囡^{クニ}經營功^{イサ}の事^{コト}の^シ故^ユ。囡^{クニ}魂^{タマ}と云ひ。天上の神^{カミ}ふし。囡^{クニ}魂^{タマ}ある故^ユ。小^コ天津^{ニギハヤヒ}を云ふや。天^{アメ}之^ノ掌^ニ玉^{タマ}神^{カミ}也^{ナリ}。又^{マタ}ト部^ト兼^ニ俱^ニ説^ハふ。大^{オホ}己^ニ貴^キの^ノ一^{ヒト}名^ナあり。又^{マタ}云^ハふ。躰^{タマシ}囡^{クニ}王^{ミコ}と^シ思^ハひま^が牙^ハあり。凡^{ソレ}て^モ此^ノ人^{ヒト}あ^らど^の説^ハを^モ未^ダしく^テ云^ハふ。足^{タラシ}事^{コト}此^ノぞ。け^レて^モ今^ノ此^ノ神^{カミ}此^ノ子^コを^モ撰^ヒ出^スと^シゆ^も。昔^{ムカシ}父^{チチ}此^ノ彼^カ囡^{クニ}功^{イサ}あ^らし^縁あ^まむ。囡^{クニ}神^{カミ}等^{トモ}も^モ殊^ヘよ^とく^懐き^あむ^の意^イも^モ有^ルむ^ら。○天^{アメ}稚^{ニギハヤヒ}日子^{ヒコ}は^シ師^シ云^ハふ。阿^ア米^メ和^ワ加^カ比^ヒ古^コと^シ訓^ハ來^レレ^バ。名^ナ義^イ異^ナふ^ゆ。谷^ヤ川^{カハ}氏^シ云^ハふ。此^ノ神^{カミ}の^ノみ^も神^{カミ}を^モ命^イと^モ云^ハふ^ゆ。處^{トコロ}一^{ヒト}も^モ外^{トコロ}し^{。出}雲^{イセ}。免^メと^シる^ゆ外^{トコロ}は^ハべ^し。と^シ云^ハふ^信よ^然る^ば。神^{カミ}名^ナ式^{シキ}。囡^{クニ}出^イ雲^セ郡^ノ。天^{アメ}若^{ニギハヤヒ}日子^{ヒコ}神^{カミ}社^ヤ二^ニあり。今^{イマ}云^ハふ。此^ノ二^ニ社^ヤ。出^イ雲^セ風^ノ土^{ツチ}記^キ。阿^ア受^{ウケ}社^ヤの^ノ同^{トウ}。

社と云、が、あま、と有る、其、中の、二社あると、し、抄、よ見え、と、り。 囡史、貞觀十三年二月十六日、授、近江、囡正六位上、天若御子、神從五位下、とある。め、此、神、よ、や。古今集、序、細注、よ、此、神、を、阿、米、和、加、美、古、と、し、人、を、阿、米、和、加、美、古、と、云、ふ、本、の、天、若、日、子、の、事、と、り、起、て、後、世、よ、天、よ、り、降、ゆ、人、を、凡、て、然、稱、ふ、こ、そ、ら、。○天、也、加、久、弓、天、也、加、久、矢、。天、麻、加、古、矢、。此、を、書、紀、小、天、真、鹿、兒、弓、天、真、鹿、兒、矢、と、あり。古、事、記、よ、麻、迦、古、師、説、よ、鹿、兒、と、は、和、名、抄、よ、も、鹿、其、子、曰、麋、和、名、加、此、と、あり。鹿、の、あ、や、ふ、し、て、其、子、を、云、よ、は、非、必、多、鹿、を、も、鹿、兒、と、云、ふ。馬、を、も、常、よ、駒、と、云、ひ。猪、を、も、韋、能、古、と、云、ふ。と、同、例、外、也。猪、一、名、豕、と、あり。○今、云、兒、あ、ら、ぬ、麋、鹿、を、も、け、て、古、よ、鹿、兒、と、云、ふ、證、を、應、神、天、皇、卷、よ、見、え、と、り。け、て、古、よ、

め。獵カ小獸キまと鳥カれとを射イるよはチ小キ死チ弓カ矢カを用ヒ。猪
 鹿シあと大キある獸よは弓カも大キふして強ツきを用ヒ。矢カも長
 死シを用ヒむ。故鹿カ兒カ弓カ鹿カ兒カ矢カと云カ。大キ弓カ矢カ此レ稱カふ也。
 鹿カ兒カとは只鹿の意カふてこそ弓矢カよも各カけカれ若鹿の
 子カ此レ意カあらむカ。弓カ矢カよも各カけカれ若鹿の
 造カれる故此レ考カ委カらレば。香山カの木を以て。ちて加久
 弓カ加カ久カ矢カ此レ加カ久カは。麻加カ古カ此レ加カ古カを同じ。今云カ古カ事カ記カ
 き書カ紀カよカ。天カ鹿カ兒カ弓カとあり。上ある真鹿カ兒カ。麻カ迦カ古カ
 あり。己が私よ加久カ弓カと改カ絶カ於カそカ。加カ久カ古カを久也通音カ
 弓カ加カ久カ矢カと相カ對カへ依名カあり。伊加カ古カ万カ葉カ十カ三カ。伊カ香
 近カ江カの郡名カ伊カ香カ。和カ名カ抄カよ伊加カ古カ万カ葉カ十カ三カ。伊カ香
 古カと加カ久カを通ふ例あり。伊香カ具カ神カ社カとあり。古まカ加
 圖カを古言カよ加久カ美カと云カ。正カまカ鹿カ兒カの兒清カへき古カを此

清音の久字を書るよて知べし。○今云是も然しも清
 濁ふ拘るるはらび其天香山命を天香語山命天迦
 久神を天迦具神ともあれバ加古とも加基とめ加久と
 も加具とも云しあり。然まど本を清音あること云も更
 ちて古事記ふ。此ハ天也麻迦古弓天也波久矢と加
 き下キ雉キを射シは處カよカ。天也波士弓天也加久矢也云
 依を相照して考ふ。眞鹿兒弓加久弓波士弓一ふして
 別物よ非也眞鹿兒矢加久矢波久矢一ふして別あらば
 鹿兒とカ鹿兒を射る由よて弓矢共よ其用を云る名波
 士は木名波久カ羽の状カて。おれらは其體字云字依名
 羽也。今云あ布第百九段波士弓波久カちて神武天皇紀ふ
 矢とある処よ註ふを見べし。ちて神武天皇紀ふ
 天皇饒速日命の天羽久矢を御覽し加の天神此御子

凡^レと云ふは、偽^ニあらざるを、知^ル食^シはと御^ミ自^ラ所^ニ御^ミ佩^ル。
天^ノ羽^ノ、矢^ヲ示^シ賜^ハひしうば、長^ナ髓^ノ彦^ノがい多く、跋^ヲ踏^ルしあ
ど、我^レ思^フ子^ヲ、か、器^ヲあども、天^ノ上^ノの朝^ヲ廷^ニた、其^ノ制^ヲ此^ノ因^ニ。
此^ノ尋^ノ常^ノのを、ハ遙^ニ小^ノ勝^マまで、異^ニ凡^ノる状^ヲふぞ有^リけらし。○天^ノ
稚^ノ日^子亦^モ云^クと云^フ亦^モ。天^ノ穗^日命^ニ此^ノいまど復^ク奏^ルけら
ゆ故^ニ。彼^ノ神^ヲを忠^ニ誠^ニあらばと思^フへ、依^テ對^テ子^ヲて。此^ノ神^モ亦^モ
忠^ニ誠^ニあらばと云^フ依^テ凡^ノ。○稚^ノ因^ノ王^ノ神^ノ師^ニ云^フ下^ニ照^ル比^賣父^ノ。
神^ニ此^ノ御^ノ名^ニ此^ノ大^ノ因^ノ魂^ニ對^テ子^ヲて。稚^ノ因^ノ王^ニてふ名^ヲをしも負^ヒと
依^テ。女^ノ神^ヲあづら。父^ノ神^ヲを輔^ルて。因^ノ經^ノ營^ノは大^ニある功^ヲそ有^リ
らむ。されむ當^ノ時^ニ威^ニ勢^ニめ有^リけむ故^ニ。今^ノ天^ノ若^ク日^子。此^ノ因^ノを

得^ルむと欲^スふ心^ノのら。此^ノ神^ヲをも娶^ルきらし。○留^リ住^ル而^テ留^ルを天^ノ
因^ノ小^ノ歸^ルらば、其^ノ依^テ。此^ノ因^ノは居^ルるを云^フ。住^ルと云^フ言^ハは、其^ノ處^ニ
は長^ク住^ス居^ルるを云^フ。本^ノよ凡^ノ此^ノ事^ヲあ依^テ。長^クを在^ル
らばとも。只^ニ男^ノ此^ノ女^ノの許^ニ通^ルひて。供^ニ小^ノ寢^ルること字^ヲも住^ル
を云^フ子^ヲ。此^ノ處^ニを何^レれよても有^リるべし。猶^モ男^ノの女^ノ此^ノ許^ニよ
傳^ルよ註^ス。○欲^ス取^ルを、袁^ノ佐^ノ米^ノ牟^ノ登^ノ欲^ノ布^ヲとも。志^ニ良^ノ牟^ノ登^ノ欲^ノ布^ヲと
も訓^バ。袁^ノ佐^ノ牟^ノ流^ノは長^クと凡^ノ活^ルは依^テ語^ヲあるばし。の箴^ニも機^ニ
同^シ言^ハ。○至^ル八年^ヲを。必^シも八^ノの數^ヲ小^ノ拘^ルはらば。大^ニ凡^ノ。八
年^ヲどめをいふ意^ヲあ。上^ニ。
此^ノ至^ル三年^ヲもあま。同^シ。

是時高皇產靈神。怪其久不來

報而。亦問諸神等曰。天稚日子

久不復奏。又遣曷神而當令問

其淹留。出由問給矣。於是諸神

等及思兼神答白。可遣雉名鳴

女焉。白出時。詔出。汝行而問天

稚日子狀者。汝使葦原中囿由

者。言趣和其囿。出荒振神等也。

何至八年。不復奏焉。宜問詔出

而。乃遣名鳴雄雉。則此雉飛降

テ。ミテ。アハ。フ。マ。メ。フ。ラ。ト。ミ。リ。テ。ズ。カ。ヘ。ラ。カ。レ。マ。タ。
而。見。粟。田。豆。田。雷。而。不。返。故。復。

ツカハシナナキメキミシラテウカミハシムコレイマニ
遣。名。鳴。雌。雉。而。令。伺。出。此。於。今。

コトワザニイフキミシノヒタツカヒトコトノモトナリ
諺云雉頓使出縁也。

曷神字書小島猶何也と見也。○淹留は師云比佐志久登
登麻流と訓べし。字書ふ。淹久留也と見也。淹を比佐尔と
あけて上よ。天稚日子久不復奏をりてはよ此ふ如是
何ゆえ同語の重して煩しく聞ゆれれど古文うは如此

ゆ類多し。漢のよも古うハ後世の文あらば問其所由と
ぞ云はまし。○雉名鳴女師云雉ハ伎藝志と訓べし。雉之

を添て読を。上ハ八千矛神の御歌よ見也。名鳴女を先
ひが言あり。伎藝志と云名は。其鳴聲を以負とゆ物あまむ。凡て鳥虫
其鳴声を以て名とせる例多し。已が名我呼て鳴意ふて。名鳴女とは云
あ。書紀よ無名とか。はて此を。雉とれみ云ても事足れ

ゆを。又かく名鳴女としも云ゆは。御使よ遣は處ある故
ふ。人絶り志記名を舉とゆ物あ。如此をうあどちあゆ
也。後世のあまさうしき心よを。如此古傳の絶でと記あ
云を。浅むりよ思ふ人も有あむ。女と云は。凡て雌雄

ふ。人。絶。り。志。記。名。を。舉。と。ゆ。物。あ。如。此。を。う。あ。ど。ち。あ。ゆ。
也。後。世。の。あ。ま。さ。う。し。き。心。よ。を。如。此。古。傳。の。絶。で。と。記。あ。
云。を。浅。む。り。よ。思。ふ。人。も。有。あ。む。女。と。云。は。凡。て。雌。雄。
ふ。か。は。ら。び。魚。鳥。あ。ぎ。の。名。を。は。某。女。を。云。ぞ。古。の。常。れ。

流。此、雉の事を口決り、神所変乎と云るハことと也。書紀云、無名雉とあるよ就て、天書云、天之後園、神也。為人清潔云々、報命不得、又無功名、故曰無名雉と云ひ、或説よ、一人ハ微賤、士を遣まを無名雉と云せ云ひ、或ハ無名とは其人の姓名ヲ匿せるを云ふ、おゞ、云説どもは、凡て後世ハ、おま賢き漢意とり云ふ、おま、取るよ足らば、案の雉、けて此度の御使よ、かく雉鳥をしも撰びて遣はせしは、如何ある所以、測難、れども、漢籍ども見ゆ。雉を、物聞こと聴く、又とく、耿介を守る鳥、お、云、れむ、ちる由よ、ぞ有らむ、か。雉、記、月、令、よ、季、冬、之、月、云、句、其、頸、也、前、漢、書、五、行、志、よ、雉、者、聽、察、先、聞、雷、吉、故、月、令、以、紀、氣、ま、と、礼、記、よ、士、相、見、之、贊、各、執、雉、註、よ、取、其、守、介、不、失、節、お、ど、云、へ、ぬ、○詔之、此、上、よ、召、雉、お、ゞ、云、言、れ、有、ら、き、よ、無、き、は、言、を、畧、け、ゆ、お、。○汝、行、而、の、汝、雉、を、け、ぬ、○汝、使、れ

汝を、天若日子、お、。○言趣、和師云、和を夜波世と訓ふ。記中、ふ多く有て、和平とも平和をも見也。万葉二、ふ、千磐、破人乎、和爲跡。今、本、よ、此、和、爲、を、那、基、は、と、二十、よ、知、波、夜、夫、流、神、乎、許、等、牟、氣、麻、都、呂、倍、奴、比、等、乎、母、夜、波、志、大、殿、祭、祝、詞、ふ、言、直、志、和、志、古、語、云、坐、氏、云、倭、姫、命、世、記、よ、夜、波、志、く、都、米、奴、ど、見、え、ぬ、お、。○名、鳴、雄、雉、名、鳴、雌、雉、前、よ、雉、名、鳴、女、と、ある、を、總、名、お、は、雌、雄、を、別、云、へ、る、故、り、名、鳴、を、上、ふ、付、と、ゆ、お、。○粟、田、豆、田、を、字、け、如、し、田、を、布、と、訓、る、意、を、麻、生、蓬、生、奴、ど、此、生、ある、は、し、舊、事、紀、よ、雉、の、外、よ、鳩、田、よ、お、きて、の、○令、伺、之、前、よ、遣、せ、ゆ、雄、雉、が、返、さ、ゆ、由、と、添、言、ある、は、し、

加祕て天若日子アルカサ有狀カタを伺カガひ視ミし給タマふれ也。○諺コトワザ也。
 師ウシ云許コト刀ト和邪ワガと訓ト也。抑ク此許刀和邪コトワザてふこと也。事コト態カタと言コトふ。
 同ドウくて混マシ々シれズ別ワカちカり。許刀コトを言コトふ。和邪ワガハ童ワカ謠ウタ伴トモ優ユキ禍カお
 ど此和邪ワガと同ドウくて。今世イマヨも神カミまと死シ人ヒト靈レイおのぞの崇タカる
 を。物モノの和邪ワガを云イハふ。是コトおのこし。其ソノを常ツネふは多オホく。崇タカて凶アビき事コトよ
 此コノみ云イハふ。本ホノは凶アビふも吉ヨキよもことコト也。協カク言コトおのこし。斯カクて何ナニ
 事コトふまま。人ヒト此コノ口クチを假カりて。神カミの歌ウタをセ給タマふを和邪ワガ歌ウタと云イハふ。
 言イハせぬままふを言コトふ。和邪ワガと云イハふ。○諺コトワザ也。神カミの爲タメにまふ意イ
懸カケよおきて云イハふ。稱ナあり。石屋戸イシヤド段ノ神カミ懸カケ此コノ態カタを考カガめて。大オホ如カ
 御神ミカミを招マコ奉ホウりしと云イハふ。彼段カノノを考カガめて。知チるべし。如カ
 此コノまま言コトふ。和邪ワガを本ホノハ神カミの心ココロふて。世ヨ人ヒト言イハせて。吉ヨキ凶アビこ

せを示シ諭サトとまふを云イハふ。しが轉ウツては。多オホく何ナニとおく世ヨ間マ
 不フ偏ヘンく言イハふ。はしし多オホく協カク言コトをも云イハふ。○諺コトワザ也。字ジを轉ウツれる方カタ
よて當タウらび。○頓使トシ頓トシ也。比多ヒダと訓トおのこし。神代カミヨ紀キふ。頓トシ在此ココ云イハふ。
 毘陀鳥ヒダタとある此コノ正マサき據ヨロおのこし。○諺コトワザ也。生ナマ頓トシ得トク争カかまと履ツ中ナカ天皇カミ
紀キふ。自ミ是コノ後ノチ頓トシ絶ツ以テ不レ抑ク比多ヒダてふ言コトは。此コノ餘ホカも比多ヒダ須ス良ラ
黠セツ飼部シおのこしもあり。抑ク比多ヒダてふ言コトは。此コノ餘ホカも比多ヒダ須ス良ラ
 云イハふ。比多ヒダ毛モ能ノ云イハふ。比多ヒダと云イハふ。今世イマヨも云イハふ。純マカ一ヒトむきよ
 爲事スルコトと頻シキて爲事スルコトと云イハふ。○諺コトワザ也。万葉マンヤクふ。直ナ土ツチ直ナ左サ麻マおのこし
のみある。比多ヒダを云イハふ。比多ヒダと云イハふ。頻シキふ物モノは由ユりて。比
 多ヒダ使シを。今イマもも言イハふ。語コトおのこし。然シカまま此コノ比多ヒダ頓使トシを前サキに
 遣ツしとる雄雉オウジが返カららざる故ユ。はと比多ヒダと雌雉メジを遣ツし

故其雉自天飛降而居天稚日

多依を云ふ也。師説と甚く異あり。記傳と合考ふべし。口
使之使也と云ふ。頓使者急使也と云ひ。纂疏よ。卒然差
思ひとる物よて。比多てふ言よ當らぬ。非あり。けて比多
てふ言ふ頓字を當と依は。師云如何依由より。字書ど
もを考るよ此字よ。比多を訓べき義を見え。然まを
ぬ。神代紀の頓丘はさ依物ふて。卷くふ必ひぬぶると云
げき處よ。此字を用ひぬるを思ふよ。いりよも據あ依べ
く見えとまむ。此をあむとく考ぬ。純字ふ屯音もあ
ふ。例衣と云あり。純を比多よ。これり。万葉十二
よ。純裏衣と云あり。こまら比多とも訓ぬべし。

カレソノキシヨリアメトビクダリテ平アメワカヒ

子門出湯津杜木出杪而委曲

コガカドナルユツカツラノキノスエニテツブサニ

如天神出詔命告矣爾天佐具

ゴトアマツカミノオホミコトノノリキノニアマノサダ

賣聞此鳥出言而語天稚日子

メキ、コノトリノイフコトヲテイヒアメワカヒコニ

言此鳥者鳴音甚惡也故可射

ケラクコノトリハナクコエイトアシカリカレタミネトイ

殺云進則即天稚日子持天神

コロシイヒス、ムレバ、スナチアメワカヒコモチアマツカニ

出所賜天出波士弓。天出波波
矢而射殺其雉焉。爾其矢。自雉
宵通而逆被射上而到高皇產
靈神出座前矣。時高皇產靈神
取其矢而見行者。血著其羽也。

爾高皇產靈神。此矢者昔所賜
天稚日子出矢也。今何為而來
歟。矢羽血染者。蓋與因神相戰
而然歟。詔而示諸神等。而呪出
曰。或天稚日子不誤命。為射惡

カミラシヤノキツルナラバガレアタラアメワカヒコニ
神出矢出至則不中天稚日子

アラキタナキコロバアメワカヒコニコノヤ
有邪心則天稚日子於此矢麻

ガレトノリタマヒテトラレソノヤラテヨリソノヤノ
賀禮也云而取其矢而自其矢

アナツキカヘシタマヒシカバアタリアメワカヒコガネタル
穴衝返出則中天稚日子出寢

アグラニタカムナサカニテタチドコロニミマガリキコ
胡牀高曾坂而立處身死矣此

ハアメワカヒコレニロナヘテヤスミフセル
者天稚日子爲新嘗而休臥出

トキナリコレヨボトノイハユルカヘシヤオソルベレトイフ
時也此世人所謂返矢可畏出

コトノモトナリ
縁也

門を此園よ淹留て住居家のお也此家は何園ありむ
知がふし。出雲園よも。湯津杜木師云湯津を五百箇ふ
て此を枝の繁杞を云。今云湯津の五百箇ある由を第十
見五百津眞賢木百枝槻百枝杜樹五百枝賢木あどあ依

類亦^レ万葉二^レ五百枝刺^レ繁生有^レ都賀乃^レ樹乃^レ也^レ詠^レ
をも思ふ^レ也^レ。まよ湯小竹ふとある湯も同く五百よて
繁きをいへり凡て湯津を清潔の意と
あり^レ。非^レ杜木は書紀ふ^レ此云可^レ豆羅とあり^レ。まよ杜樹を作
る也
古事記ふ^レ湯津楓とも湯津香木をも書て^レ訓香木云^レ加都
良と見也。字鏡よ、椿加豆良とある也、ちよ和名抄ふ楓和
香木を一よまよと字あり
名乎加^レ豆良桂和名女加^レ豆良とあり^レ。常よた加都良よた
楓字をのみ用ひて
楓字^レ後世よ加^レ閉手よ用ふ^レ。まよ楓は爾雅註ふ似^レ白楊
さよど楓ハ加^レ閉手よ非^レ也
葉圓岐有^レ脂而香^レ今之香楓是也と云ひ^レ他^レ漢籍ともよ
とく紅葉^レなる物と云ふ^レ。貝原氏説よ^レ楓を^レ其葉信^レふ白楊
ふ似て^レ兩^レく相對^レふ^レ。賀茂祭よ用^レふか^レ扱^レら^レ是^レ亦^レ筑紫よ

てもう扱^レらぎと云^レ。其葉か^レ牙^レで与^レり大^レよて花^レをけ^レげ
此花の如くよて^レ三四月よ開^レく^レ形状^レを^レうらの書ふ^レ云^レる
楓よ似^レるまよとぬ^レ。紅葉^レせ^レば香^レぬ無^レしとあり^レ。今考^レるよ賀
茂祭よ、葉と
共^レ用^レふる加^レ都良^レを^レ信^レよ香^レも^レ次^レよ桂^レを^レ今昔物語よ^レ天
暦此御時^レもろ^レあしよ^レ參^レ來^レる^レは^レ長^レ秀と云^レ僧あり^レ也^レ。
五條西洞院あり^レ處^レよ^レ桂宮と申^レ出^レは^レ其門前^レよ^レ大^レあり^レ桂
木あり^レなる故^レふ^レあ^レむ名^レけ^レる^レ。彼^レ長^レ秀も^レ也^レ醫師^レあり^レ也^レけ
る^レ。其木を見て^レ桂^レ心^レを^レ此^レ因^レよ^レも候^レひ^レ也^レとて^レ其^レ枝^レを
伐^レ取^レせ^レ桂^レ心^レ伐^レ取^レて^レ藥^レふ^レ扱^レら^レひ^レは^レ漢^レのよ^レ勝^レら^レ也^レ
とあり^レ也^レ。此^レ加^レ都良^レ今^レも有^レて^レ全^レ漢^レ籍よ^レ云^レふ^レ同^レじ^レ。即肉桂
と呼^レぶ

あり。今も有とて桂宮あるを云う然まば古より有し物
は非也此御園あるを云なり。 然まば古より有し物
ふて源氏物語あどふ加都良と云ふも此屬あ也。但し漢
籍よいふ桂を御園うを稀らよあそあま古書よ加都良
を云ふ趣は何處よもく。徧く有し物とぞ聞ゆる。故思
ふよ。今世ふ多夫と云ふ木あり。何處よも多物ありて其状
見分難きまで桂よ似と也。 処よとりて陀母とも陀麻と
も藪肉桂とも云ふ貝原氏云
葉を桂よ似て香はくあし冬赤実ある一種をくはとふ
と云ふ葉白とぶの如くよて殊よとく桂よ似たり。此葉
も桂葉と同じく本と区分よとる。総理三條の邸実を冬
熟して黒し香も桂よやく似て味も辛し右二種ともよ
大木あり。かくまば古ふ加都良と云しはあばてて此多
夫の木ふて其中よをる方く。彼桂宮よ在しが如き眞

此桂の交るむをも一ふ呼しぬるべし。右此如くあまを。
楓と桂は近き類の木よを非也甚異なるを和名抄よ
同類此如く。牝牡を分て出せるは元より同類うを非ま
ども名此同くて混はしき故ふ。中昔のあろ假よ牝牡と
分ち云しぬゆべし。 さまど其を殊よ分て云とき的事よ
あそ有ま常うハくニあがら加都
良とのみぞ云々む故和名抄の外 ちて古事記あどふの
ハ牝牡此名見えとる事ぬし
依て楓の桂りや云よ。香木やも書き。 字鏡よも橋加
豆良と見え 是と
古書中昔此書までふ人此門ま庭あぞふぬ在しあを。
はと彼桂宮のあど我思ふよ。桂此方ぬるべし。 但し源氏
物語花散
里巻よちやくぬる家のあどちあどよしだぬるよ云
云。大きあるうあらの木此おひ風よ祭のころお布し出

られて云く、是を楓と聞えたるは、香も有げよきこ也。處
女、卷よまかりのころを云く、前、齋院を、おまくととあが
先たるふおまきあるの、於らの下風、おつりし死よ、おけ
ても、こりき人々を、思出るおや、もあるを云く、是も楓
と聞え、然るは古事記よ、乎加都良よ當と、楓字をぬ書
ふ、依を、ぬ、加都良よ用と、る字を借ま、依れみあ、古、
ふ同じ、ぬ、まむ、其、文字、
す、楓を、香木と云、依き物よ、非、交、漢籍
は、香楓ともあま、ど、御、因の乎、加都良よは、香、れ、き、あ、を、
右よ云、依が如し、ま、古書よ、楓、字を、書、る、を、楓、香、木、と、あ
ける、處、も、香、木、と、あ、依、處、も、事、の、さ、
ま、全、同、物、と、聞、え、て、二、す、非、交、
は、と、書、紀、よ、杜、木、を、書
依を、古、杜、字を、當、と、る、由、は、心、得、難、な、ま、ど、字、鏡、よ、杜、毛、利、
又、佐、加、木、と、あ、る、哉、思、ふ、よ、か、此、今、云、多、夫、の、木、は、殊、よ、み

おみおま、最、よく、榮、也、依、木、あ、ま、む、上、代、よ、是、を、も、榮、樹
よ、用、ひ、は、と、神、社、あ、ど、よ、も、殊、よ、多、く、有、ら、む、故、よ、や、が、て
毛、利、よ、ぬ、此、字、を、用、ひ、し、あ、依、を、し、
加、志、を、も、古、を、榮、樹、よ、用、ひ、と、り、此、彼、を、合、せ、て、
思、ふ、よ、杜、木、と、書、る、も、女、加、都、良、の、方、あ、り、ぬ、
師、云、都、婆、良、加、爾、を、訓、字、あ、ま、ど、も、此、を、麻、都、夫、佐、爾、と、訓
を、し、
神、此、言、上、の、八、千、系、
○、杪、は、木、末、あ、す、
○、天、神、之、詔、命、を、
は、師、云、右、孔、汝、使、葦、原、中、因、由、者、云、く、と、あ、依、詔、あ、す、
此、因、よ、降、て、の、處、あ、る、故、よ、天、照、大、御、神、高、
皇、産、靈、神、を、天、神、と、を、申、せ、り、下、も、同、じ、
神、代、紀、一、書、よ、
其、雉、居、杜、樹、之、杪、而、鳴、之、曰、天、稚、彦、何、故、八、年、之、間、未、有、復
命、と、も、あ、す、
○、天、佐、具、賣、師、云、書、紀、よ、天、探、女、此、云、阿、麻、能

^サ左愚謎とあり。今云、和各抄鬼魅類もも日本紀私記云、天
^探女と見ゆ師の引れとると異^異日本紀口訣ふ天探女者從
 神護女也と云ひ纂疏ふ天稚彦之侍婢也とありぬど然
 も有ぬべし。名意ハ。或人此探女探他心多邪思也と云依
 此意あり依^{落窪}物語ふあさくおりそ云云あこきと
 あ^巴あこきを指てはくおりと云るぬり源氏物語も
 さくありおよげとあり此等のさくおりと云こと佐
 具賣の名義今世の謗ふ天之佐古と云を此名あり其も
^{カニ}左右よ人小悖ひて心惡き者をぬむ云然る伊勢の飯野
 てふ村あり名おけ^ハ万葉二^一。久方乃天之探女之石船乃
 泊師高津者淺爾家留香裳とあり代匠記ふ此を説て云

く。津因風土記云難波高津ハ天稚彦が天降し時屬て下
 ま依神天探女磐舟小乗て此に至る天磐舟の泊る故ふ
 高津と號くと云ふ右歌まと風土記よ依ときを天よ
 降ま依神あり然るを神代紀一書ふを因神をゆめい
 ぐ今思多よ天を名よも負とれむお天よ降まゆと
 せむ。神名帳あり撰津因東生郡比賣許曾神社を四時
 祭式臨時祭式よ下照比賣社とも号くる由ある
 よ依て此神社を天若日子の妻よあまより下照比賣と
 得て右の万葉哥をも引合せ見ると非ありの比賣許
 曾社を別神よて其由縁應神天皇巻よ見え
 とり名此同じきを以思ひ混ること勿き
^ヒ比耶良久を訓べし。○甚惡也ハ伊刀阿志加理と訓べし
 師云阿志とを不祥の意ふ云るありべし。阿志を阿志と
 といふを俗言

○古史傳二十一
 ○三十四

あそれよ取てはと二意よ聞ゆ。一ふは詞の如く。あ鳴
正。それよ取てはと二意よ聞ゆ。一ふは詞の如く。あ鳴
音。不祥と云う。二ふは鳥ある故よ。鳴音とは云れども。
實ハ言よとの趣を天稚日子が爲ふ不祥こそ取て云
ゆ。○可射殺ハ。射殺賜比泥と訓べし。○云進則師云云
を云くと云てふて。上牙屬に進を勸むるよて。厲はしそ
そ此のひあり。神武天皇紀ふ。皇師大舉將攻磯城彦先遣
使者徵兄磯城兄磯城不承命更遣頭八咫鳥召之時鳥到
其營而鳴之曰天神子召汝怡埜過怡埜過兄磯城忿之曰
聞天壓神至而吾爲慨憤時奈何鳥鳥若此惡鳴耶乃彎弓
射之鳥即避去と云。此段ふ甚とく似とる事あり。○天

之波士弓師云上ふを天之加久弓とあり。其を用を云る
名。此を體を云ゆ名よて。同弓あるまや。上よ云ぐ如し。體
を云や。は。波士を木名ふて。梓弓槻弓れどの類ふ。波士も
て造れる弓あり。そは常を櫛字をうけり。和名抄よを。
染色具部ふ。黄櫛。文選注云。櫛。今之黄櫛木也。和名波邇之
とあり。是あり。天皇の御衣。此黄櫛。漆これあり。波邇志とも波士とも云
は。櫛を加溲とも云や同じ。ま。と。土師をも。名義を。或人植
此色とる木あり。故ふ云と云。此木を今俗ふ。波是と
いひ。山漆とも云て。實をむ。蠟燭ふ造る。葉はとく紅葉は
流物。了て。歌よめ詠。或人は。此木今も弓ふ造ると云き。

或云木を切て見まば其こぐち外を白くして内の心黄
あり其黄ある心を弓よを造るあり物を染るよも用ふ
山よ生るるを山はせと云て里よ生 ちて書紀ふ。梘弓と
書れとまど。梘をちれしめて。小木あまば弓を造るは
きよ非交。まは和名抄の同。深黄色部よ。梘子を挙て唐韻云
染る物あはら。此字を當てるあはべし。或説よ。波士ま
桑の類れりと云て。書紀よ。梘字を當られとるを。尔雅ふ
桑辨有。甚曰。梘やあるふとれりと云。○天之波く。矢師説
をいと物遠く當らぬ説あはらぬ。ふ。書紀よ。天羽く。矢と書れと。上ふを天之加久矢と
ふ。書紀よ。天羽く。矢と書れと。上ふを天之加久矢と
あ。其は用を云る名。此を體を云る名。同。矢ある事
上よ云が如し。波く。矢は羽張矢よ。羽の廣く大あはを
云。れ。あ。し。絹布の類。幅を省き。波。と云も。同じ。例
あるを思ひ合はべし。私記よ。以。鳥。羽。波。久。矢

也。加。重。點。者。言。其。羽。之。矢。衆。多。也。と。い。ひ。纂。疏。よ。一。雙。之。矢。
也。と。云。る。あ。ど。を。殊。よ。を。さ。あ。し。は。と。古。語。拾。遺。よ。大。蛇。を
羽。く。せ。云。せ。云。る。こ。と。あ。る。を。引。て。ち。て。口。訣。よ。作。二。羽。矢。
解。る。説。あ。り。い。み。じ。た。強。説。れ。ぬ。 於。神。社。納。二。羽。矢。と。云。ひ。は。と。其。後。の。説。等。ふ。三。羽。を。中。古
よ。と。せ。れ。製。ふ。て。上。代。の。矢。を。皆。二。羽。あ。と。と。云。或。は。二。羽。と
云。を。鳥。の。全。羽。二。あ。ま。ば。矢。ふ。作。る。處。を。四。羽。れ。と。今。も。上
刺。れ。鳴。鏑。よ。此。を。用。ふ。ま。き。古。の。製。れ。ぬ。今。蝦。夷。の。矢。ぬ。然
あ。と。と。云。と。今。按。ふ。右。れ。説。等。よ。上。古。れ。矢。を。皆。二。羽。あ。め
せ。云。は。實。よ。然。る。は。し。但。し。上。古。れ。矢。凡。て。二。羽。れ。ら。ば。此
羽。く。を。い。よ。二。羽。の。意。よ。非。じ。其。故。を。後。世。の。如。く。あ。は
て。三。羽。あ。ら。む。よ。こ。そ。二。羽。矢。を。ば。分。て。其。由。を。以。て。も。名

おくばらま。おぼて二羽おらむるを。何ぞり分て二羽の
由をもて名おらむ。然まむ上古此矢を。二羽おめと云を
然る説おのら。其意をめて羽を解くは。却て後世此三
羽ふよまざる者れ也。其う牙は二羽おらむを。羽くと重祿
云むこといふ。若二羽の由おらむ
直よ二羽矢と云そ云。然二侯小舟二鞞まよ七枝刀。と言
七子鏡おぞ云名を思ふべし。古の例これ然あり。と云
まぬ也。此説ふ依まむ。舊事紀よ。天羽く弓。天羽く矢を
遊羽く弓も。むげよ造言とも云がぬし。其を出雲風土記
よ。天羽く鷲とあるも。羽張とる大鷲を云也。と聞ゆ。ゆふ
思ひ合ひまば。弓れは。廣く厚たむ。力強き故。大弓を
波く弓と云らむも。知べうらむ。然れど師を。羽く弓と云
るを。羽く矢は。効ひて云

る造言あり。さゆ弓の名あること。○逆被射上而を。師云。
れし。と云まむ。猶とく考ふべし。○逆被射上而を。師云。
樹上小居物を。下よ射る矢を。故よ。上牙射上らゆ
あ也。逆とは。上牙射上ゆとたむ。羽の方此下ふおめて行
故よ云ゆ。○見行者を。美曾那波須禮婆と訓はし。此詞の
ことむ。
第十一段の傳よ。○血染者を。知麻美禮多流波と訓べし。
註るを見べし。○血染者を。知麻美禮多流波と訓べし。
染を麻美礼と訓るを。延喜本の訓を採まむ。今俗
言よ。血マブレあど云ことあり。同語あるべし。○示を
岡部翁此。美世を訓れあるふ従ふはし。○呪之曰は。師の
登許比氏能理多麻波久。と訓まむ。従ふを。師云。此
事此例を。神代紀よ。磐長姫大慙而詛之曰。天孫不斥妾而
御者生兒永壽有。如磐石之常存。今既不然。唯弟獨見御故。

其生兒必如木華之移落ウツロヒナムまゝ海神云々乃以投彦火く出見尊因教之曰以鈎與汝兄時則可詛言貧窮之本飢饉之始困苦之根而後與之神功卷ふ向天而呪詛雄畧卷ふ指井而詛曰此水者百姓唯得飲焉王者獨不能飲矣武烈卷よ眞鳥大臣恨事不濟知身難免計窮望絶廣指塩詛遂被殺戮詛時唯念角鹿海塩不以爲詛由是角鹿之鹽爲天皇所食餘海之鹽爲天皇所忌あど見衣と此類ふ古よ其術あり詛あめしある言の義ハ説請う但し吉くまと請事と請よのみ去せ能呂布と同じさるふて伊勢物語ふあま此逆手を拍てあむのろひをるぬ依あぞほるぬ詛あ巴又麻士那布ハ吉凶よ通はし云りされど麻士とハ凶ふのみ云牙むまじあふを善事ふも云々後の轉やあ

らむけて詛字ハ請神加殃謂之詛まゝ謂祝之使沮敗也あど注せりと有ゆ此説此如くあ依但し信友説よトコヒは利請あ也トはスドスルドあどのトふて神よ某を云く令在給へとせ先て利く請ふれ也云り然も有らむり猶或ハ母志記傳十三卷三十八丁の師説見合べし○或ハ母志や訓○不誤ハ多賀閉受と訓ばし○惡神ハ阿良夫琉神と訓前よも○爲射ハ師云伊多理志と訓べし右ふ血著其羽とあまば此を惡神の身を射通と射通し矢此來れるるや御思し御思しとる意あまむれ也為字多理志てふ辞よ當て書依ありかく依書○至則ハ來都流那良婆と訓べし○不中ハ師云岡部翁の阿多良邪禮と訓まおたるふ從ふ不る麻賀礼とあるよ對へまむ○邪心ハ師云伎多那伎心阿多良自せ訓ハ己ろし○邪心ハ師云伎多那伎心

之訓べし。此を天神の命よ背奉りて賊害心を云也。御所
 牙矢を射上ぬれむ也。まよ血著其矢羽とある也。此牙
 雉を射とるうと御思て詔ふと比べし。當時葦原中固よ
 他了天神の御方をしる天若日子よ敵ふべき神を無れ
 むあり。さまどおた。只御所へ矢を射上とる。○麻賀禮は
 よおまて此事のみ見るぞ安らう也。師云まお萬此吉善を直と云ふ對ひて。乃此凶惡を麻賀
 せ云。今云此事を第二十四段の故り御禊段よ禍とつけ
 也。儲そを體言おゆ。用言ふして也。麻賀流と云。歌をい
 を用言りハ宇多布と云ひ綱と都那具雲を物の形此枉
 久母流のぬぐひ皆射を用せの差別あり。曲も其中此一あ也。はまは麻賀禮と云は。凶くおれと云
 ぶやよて。意ハ出れち死祿を詔ふあり。死るを即凶く
 麻

賀流とい。ちて然して死むを災害れまむ。かの禍字を書
 ふあり。依ととく合也。次よ引る祝詞よ高津鳥殃。○矢穴を師云。
 下固よ也。天上牙射徹と依孔あ也。禰ある漢意よ。溺れむ。
 あまけうあき人。此矢穴を疑ひて。下固と天上と此隣
 小板あどの如死物あゆ。如く聞えて。陋しを思ふら
 む。上此御誓段よ。堅庭者於向股踏那豆美といひ。又天之
 眞名井もあり。まよ畔離溝埋あども皆天上のこと。あれ
 む。矢の通也。來ある穴も無くは有べ。あら若此穴を陋
 しとせむ。か此堅庭も眞名井も畔も溝もみあ陋し。のら
 びや。さまま延佳が賞作。天空と云ふ。天空こそれうく
 小陋しくあちあれ。は師も此穴をいう。を思は
 き。陋強て矢之美。知と訓まき道あらむ。何でう穴
 とを書む。さむり古の意をよく見明らか。絶て万世まで
 の師と仰ぐべき人。あらあか。○衝返ハ都伎加閉
 志と訓べし。はて上件。の如く詔ひて。如此爲とまふ也。呪

ひ給牙依あ也。○胡床。師云。和名抄ふ。胡床。風俗通云。靈帝
好胡服。京皆作胡床。此間名阿久良と有也。書紀よも古事
かく訓り
記す也。此ふのみ胡床とありて。末り處くあ依をむみれ
吳床と書也。同物あ也。漢國よて胡床と名けしハ胡國の
制ふあらざる故ある多御國よて
此等の字を書ハ其制をうたせざる故も非多御國よて
よて胡床と云物の状や。似と依を以て其字假を
る此みふこそ其制をもとより御國のあり故師を
此ら此字を用ひしを直し。直し高座あどくこそ書依
ハれと云ま也。信よさ依ことあ也。胡床を吳床とかき
胡桃をまよ吳桃とも書る由也。第九十七段よ云也。雄
畧天皇卷よ。立大御吳床とほまむ。いと高き床と見也。凡
何ふても立とは其形状の高阿具良てふ名意を揚座あ
き物あらでを云ぬこそあり。阿具良てふ名意を揚座あ
らむ。と師の云ましはも有れむ。或説よ。編座の意とせり
を由れし。けり今俗ふ率

座ること。阿具良加久と云こと。の阿具。其の後方小倚
也。胡床よ坐とき。の坐ざはあるを云り也。其の後方小倚
加。依物あ也。後世此椅子れど此屬の状しとる物よ
や。とも思は依まど。上小寝と也。有まむ。此あ依をや
廣き床を聞えと也。左右近衛府式よ。凡胡床三百基緒。料
緋絲。基別八兩塗料。漆基別一合。隨損
申。宣請。○高胸坂也。師云。仰よ臥とる胸のさる也。坂如也
とあり。タカハナサカ
高きを云名あり。然るを如此あ依ふあらひて胸とある
城何処もく多加牟那佐加を訓を非
あり。仰よ臥とる處よこそさむ云牙れ。凡て胸の古名よ
を非安。はと書紀ふタカムナサキとも訓る也。も古事
記ふ依て。タカムナサカと訓る本を見て。まよ心前を云
はとも有を思ひて。能も考へ安。まよはらよ改とる
誤也。書紀す也。高胸と書て。此云多歌武娜娑歌とあ也。遷
却崇神祝詞ふ。又遣志天若彦毛返言不申氏高津鳥殃爾

依氏立處爾身亡支とあるは御使比雉を射とせし依
て此殃小遭るを云ふ高津鳥此事の殃と云意あり天よ
れる鳥ある故よ高津 ○新嘗之邇比那閉を訓べし其由
鳥と云れりべし 此事を僭朝家と云るを誤ありけり新嘗のをとせば既小
云牙る如く甚しく齋ひ慎むと古此道あはれ字天稚日
子ちる忌憚おれして仰ふ胡床ふ臥せはれ其高胸坂より返
矢を受とりしを天照大御神の詔命よ違牙は冥罰ふ依
て果して高皇產靈神此詛言よ率ゆと依りぞ有る穴
畏○返矢を舊く加倍志夜と訓るふ従ふは世人所謂
とあまは古事記日本紀を御撰ありし頃よもよく人の

畏と云るあつと聞えとめ口訣ふ軍陳箭入時敵射返其
矢則失利矣を云はれをも思ひ合はるしよまど或説よ弓道
神鼻敵を射殺て術あり尋常人の所為あまも誠心至
るときに其驗いと著きを況て天神此御所為あれを神
異を驗の有しとぞ何ぞも疑
はむと云るも然る言と聞也

十百

故其天稚日子出妻下照比賣

出哭声與風響而到天矣於是

在天天稚日子出父天津国玉

カミマタソノメコドモキ、ソノナクコエヲテ、シリ
 神。及其妻子等。聞其哭聲而。知
 アメワカヒユガマガレテヤリテハヤキノカミヲアゲ
 天稚日子出死而。遣疾風神。舉
 カハネヲテイタシアメニスナチツクリモヤヲテアガリシテスナチ
 尸而致天。便造喪屋而殯出。即
 カハガリヲシキサリモチトサギヲシハ、キモチトスベラ
 河鴈爲伎佐理持。鷺爲箒持。雀
 シウスメト、ミンサジキヲシナキメトソロヲシモノマサト
 爲碓女。鷓鴣爲哭女。鳩爲尸者。

トビヲシワタツクリトソニドリヲシ、ミケビトトカラスヲシ
 鷄爲綿造。翠鳥爲御食人。鳥爲
 シ、ビトトスベテモテモロクノトリヲコトヨサレカク、ハコナヒサダメ
 穴者。凡以衆鳥任事。如此行定
 テヒヤカヨヤヨタリシヌビアソビキ
 而。日八日夜八夜爲哭遊矣。

與風。師云。加是能牟多と訓。ほし。万葉二。小浪之共。彼縁
 此依。ま。風之共。靡如久十。峯上。爾零。置雪。師風之共。此
 間散。良思十二。よ。風之共。雲之行。如十五。小。可是能牟多。與
 世久流。奈美爾。この餘もおふし。響ハ聲の餘。れ長引を

めはと聲の遠所へ引行をも云ふ○到天此到ハ師云伎
許由とも訓ばれど外不伊多留と訓べし藥師寺佛足
石讚歌よ美阿止都久留伊志乃比鼻伎波阿米爾伊多利
云く万葉十呼音之不至者疑ふとあり○在天ハ其妻
子と云までよ係れ也○聞其哭聲而ハ師云凡て人の死
せぬるを哀みて哭ふ其人の此世に在し不ぞ此事お
ぎをも言ひけまとい麻呂が妻よ後し時の歌よ爲便
乎無見妹之名喚而袖曾振鶴とよ終る如く其名をも呼
ぶ也よ今彼哭聲を聞て天若日子が死せしよと我知る
也也纂疏よ天囹王聞其哭聲謂天耳通又以父子同氣諸
知其死也と云何ぞせむ凡て神代の故事を漢意

よて見るのらかくる言痛き説を出来るぞくし○疾風神疾風ハ波夜知と訓ば
し和名抄よ暴風漢語抄云ハ夜知又能和岐乃加世せり也天孫
本紀よ饒速日命の死れる處よ高皇產靈神の命以て速
飄神を遣して其屍を天上よ致せるよと見也又速飄命ともあり
同神と聞えと也和名抄よ文選詩云廻颯兼名苑云颯者
暴風從下而上也和名豆無之加世とあり颯の吹さは馬の廻毛
ふ似とれむ云あらむ神名式よ出雲因意宇郡よ筑陽神
社同社坐波夜都牟自和氣神社風土記同郡よ在神祇官
と云る社此中一調屋社
同社とある是あり抄よ嶋根郡よ久良彌神社同社坐波
餘戸里よ在といへ也夜都武自神社風土記同郡よ在神祇官とあり社
中よ久良彌社同社波夜都武自別社

とある是あり抄よ久良弥社同社在
餘戸里本庄村加波阿氣谷といふり
國史よ仁壽元年九
月乙酉出雲因速鰲別命授從五位下とあるを右二社此
中ふ何あらむはて波夜知をまよ波夜氏とも云夫木集
お寄る釣○舉尸而致天云く此天稚日子は天とて降多
し神あまむ屍を舉て天上よて喪事を行むとあるを
也。古事記の傳と○喪屋師云まお喪てふ言は麻賀事此
いとく異あり切あゆよて麻賀を切まむ麻許登を切まむ許よ死と依
事此みりも非也何事ふまむ凶事を云れ也然れむ万葉
五よ靈剋内限者平氣久安久母阿良牟遠事母無裳無母
阿良牟遠十五よ伊麻太邇母毛奈久由可牟登まよ多婢

爾氏毛母奈久波夜許登六帖まよ伊勢物語よ我さ是等
此母那久也無恙と云意あり死ハ有ぐ中ふも凶事依
故よ其時の事を凡て母と云て喪字を當とて斯て喪屋
は屍を斂置て其事どもを行ふ處お也古天皇の崩坐依
時葬奉るまで此間殯宮を申ひよ坐せ奉て阿賀理し奉
し例を思ふよ殯宮の事よ仲哀天皇卷上代よ凡人も
喪屋を作して依依書紀纂疏よ即喪屋○河鴈師
云此名此と書紀の海神宮段一書よ時川鴈嬰云く
とあるを二を除て餘りハ見えび然るを多々鴈をか
め云依り口訣よ然注せり又川鳥あどの如く一種
別ふあるり纂疏よ謂鳥鴈之類をありお

鳥の一種カ留と云ありて古書どめカ加理之子と云
 其子あれむ此をも思ひまカ鴈を毛并カ兩方カを
 さじとて注さまカとるカ若然らむ信られカ又を河に住
 鳥此類を凡て河鴈と云し據ありて其意カ如此注さカ
 するカ其をさカこカまカどカ此カ種カの鳥カどもカをカ並カ挙カ
 多依中の一カあカまカどカ總名カよカてカ稱カハカ一カ此カ鳥カ名カありカ川
 千鳥あカどカ只千鳥カよカてカ濱千鳥カ磯千鳥カあカどカあカ不カ熟カ尋カ然
 も云て河に在を云あカまカどカ此の例カと異カれりカあカ不カ熟カ尋カ然
 げし。○鷺ハ和名抄ふ。崔禹錫食經云。鷺色純白其聲似人
 呼者也。和名佐岐とカ何カ也。本草和名よ。鷺一名鷺和名佐岐
 字鏡よも鷺佐義とありあカ同
 あり。○雀ハ和名抄ふ。雀和名須カ米カをカ何カ也。雄略天皇
 大御歌よ。爾波須受米とよほせ給へ也。古事記よ。雀字カ
 大雀命。雀部あカど
 佐邪伎カよ用カとれど書紀よ。佐邪伎カよカ鷓鴣カと書然る小
 て此を以雀為春女カあカれむカあカ不カ須カ受カ米カありカ。然る小
 本草和名ふカ。雀郊和名須カ美カとあカ也。和名抄よも。雀鷓
 漢語抄云。須カ美カ

多加とあまむ古くハ。○鷓鴣ハ和名抄ふ。佐カ木カとあカれ
 須カ美カも云カありカ。○鷓鴣ハ和名抄ふ。佐カ木カとあカれ
 ど。美曾佐カ伎カとも云。由は既カ注カへカ也。第七十九段
 の傳見べし。○鷓
 は。下カ翠鳥カとあカゆカ同鳥カれり。季カくカ第九十九段。大國
 主神の御哥。蘇迹。栲理の
 処カ注カせるカ。○鷓カ和名抄ふ。本草云。鷓カ亦カ作カ一名カ鷓カ和名
 を見べし。鷓亦作カ一名カ鷓カ和名
 度比
 爾雅註云。鷓一名鷓。喜食鼠而大目者也。漢語抄云。
 久曾止比と何也。
 本草和名よ。鷓頭和名止比乃加之良と見え。字鏡よ。鷓カ鷓
 鷓鷓鷓鷓鷓れどの字を止比とあり。鷓鷓鷓あカどカをカ左支と
 も有カ。○鳥カ和名抄ふ。唐韻云。鳥孝鳥也。爾雅云。純黑而
 誤あり。○鳥カ和名抄ふ。唐韻云。鳥孝鳥也。爾雅云。純黑而
 反哺者謂之鳥。兼名苑云。一名鷓カ字カ亦カ作カ雅カ和名加良須とあり。
 ○伎カ佐理カ持師カ云。書紀よ。持傾頭者カと何カをカ私記カふ。師說
 ふ。葬送之時戴死者食片行之人也カ云也。此說持傾頭の

字は拘らで如此註せるを如何様も據るゆゆと見ゆ。
此は從ふばし。口訣は助尸傾也と云纂疏は謂奉死人之
ての強言おまた云ふも足らばま去時頭傾はて
ゆゑは使佐理持と云せ云るおども更は由ふし。
書紀は持傾頭をはいうあゆ由て書れとゆふ。詳お
ら然を此字と私記説とを合せ多熟思ふ。筭飯背垂持
と云おせあらむの。部比ハ使勢多。背垂と俗言ふ物を
負を勢多良負と云こせあり。牙垂負と云意あり。けま
は私記は戴せあゆを正しく頂上お置てあらで頭を
前へ傾俯きて項よ背へかけて。飯筭を居て行あゆを
し。故書紀は傾頭とを書る。若然らむ持字は傾頭を持

ふは非也。持て傾頭お。然らむ持食傾頭者おど。あ
て。只其持たる状をのみ書るはいか。れませぬ。此を
若くは食字おど此有し。後よ脱とる。けらばとも如
此。坐る役を他事よ。例おきを。葬おのみ有て。頭を
傾け。俯て行。が。勢。お。らし。死。故。其。形。状。を。も。て。名。け。と。ま
む。其。意。を。得。て。字。も。形。状。は。と。事。は。右。此。如。く。よ。て。名。意。を
を。も。て。書。る。よ。や。有。む。と。約。ま。る。は。て。右。此。如。く。あ
頗傾背垂持ふても有せぬ。加夫志を使
て持行もあよ。其飯の名を頗傾背垂と云を約て。使佐理
と云おらはしむ。む。其使佐理の飯を持意お。見。此
を。き。た。書。紀。の。傾。頭。は。ち。て。私。記。よ。片。行。を。あ。る。を。中。よ。向
二字。即飯。此。こと。あり。字。お。と。脱。て。片。向。行。あ。ど。ふ。や。然。ら。ざ。れ。む。片。行。と。云。お。と
心得のよし。彼此よ此片行よ。傾頭字
の意を牙ありげふ見也。武烈天皇紀よ。鮪臣

グ戮さまし處へ影媛グ逐行てよ免る歌よ。拖摩該爾伊
比佐倍母理拖摩暮比爾瀾逗佐倍母理難岐曾寢遲喻俱
謀柯尋比謎阿婆例於是影媛收埋云くとゐるおぞ事の
さはよく戴死者食行と云ふよ似と也。大嘗祭式小斎場
圀の供物を渡に行列の中ふ戴御膳寮女八人と
あり是も葬事ふ非ざれども事の状を似と也。けて河
鴈此頸のさる此伎佐理持此形状よ類あるおぞゐる故
ふ。此役を元とる仇依るし。今予郷此風俗よ送葬よ水持
と云者あり死者の乳母何
ぞ親しき婦人白物を服頭をも白き布おどして結て水
を盛器を以て最先よ立行ありかの影媛哥よ玉琬よ水
さへ盛とあるふよく當れぬさまむ此伎佐理持め諸圀
の葬此風を尋ねむ今も似とること必ありて各ものこ
まる事も。○箒持ハ波く伎持あ也。師云書紀ふ持帚者と
有ぬべし。

作也。古事記よち掃字を用ふ此字を帚よ用ふる例も字
書よ見えぬも波く伎を羽掃の意おて。舂用の差
のみおまむ御圀よハ古通をし用ひ。此を葬此時帚を持
んむ万葉十六りも玉掃とけけり。て行者を云ふ也。後世よも葬からでも此事ハ有あとお
也。口訣よ葬而掃。喪屋人也と云ふを稱をば若そまぬら
ば。帚人あどくこそ云べし。帚持としも云ふを持て
行故の名ぬり台記よ久寿二年十二月十七日傳聞今夜
亥刻高陽院入棺云く。即奉遷福勝院云く。出御之後民部
大夫重成以竹箒拂御所とあり口訣の説。けて此役を驚
をかくる事も有しを思ひてあるべし。ふ任しあるを毛冠の帚ふ似とれむ也。○碓女を。師云
宇須賣と訓べし。書紀よち春女とあ也。都伎賣と訓れど
此も宇須賣を訓
を碓之者と云稱あり。けて女は部の意あらむうとも
思ふれど。外布字此如くある也。女此稽春こと万葉十
四の東歌おぞよも見

ちて此役をまば和名抄祭祀具ふ。黍餅。漢語鈔云。黍、
度岐祭餅也。粿米。漢語抄云。加之與禰淨米也。糶米。離騷經
注云。糶精米所以享神也。和名久万止禰とある。糶字を糶
糶を俗よ糶ふ作ると字書よ。黍米は今いふ白餅。粿米。糶
米也。今云洗米おす。然れむ上代ふ。殯よも此等の物を奠
し。その米を舂女ぬる。若多飯の米あらば其舂
此物を米此はくよて奠れむ。舂が其制ある故。其役者
を奉とるあり。但し予郷近き里くよて人死ぬまば庭よ
多く臼を立ててことさらふ米多舂。己ばあり他因
もさる。己ざ有べし。おま上代の儀此のこまるよや有む
此を以思牙む。奠の米此みよも非ざらむ。ちて雀小。此役
り。又口訣よ。為。黍。哺。尸と云るをころし。ちて雀小。此役
を任せざるは。谷川氏説よ。雀取躍而不歩。如舂也と云す。

信よさも有げし。○哭女ハ。師云那伎賣と訓べし。仁賢天
皇紀よ。哭女此云。難。俱謎とありまども。ちて此も谷川氏説よ。嘗聞
こを人。名よて。此を別あり。紀熊野若家有死人。傭饒舌。婆子。令之哭告郷黨。隨價高低
有哭泣。輕重云。此事ハ已も聞り。隨價高低とハ。一。鷓鴣取
其來于簷下。善鳴也と云す。今云古事記よ。雉為哭女と
哭女よ。○尸者ハ。母能麻佐と訓來れ。此と綿造とは師
合へり。尸者ハ。母能麻佐と訓來れ。古事記よ。おし。師
説よ。尸者と云も此を甚疑む。其故を。まば漢因りて尸
と云者は。神象也と禮記よあす。先祖の祭祀お設くる
者ぬめ。男を祭るよ。男女を祭るよ。女を用ふ。さてそ
父を却りて。子を父せ。然まむ此尸と云者は。彼因りても。
あて祭ることあり。

古の風俗ふおそほき甚有まじ死事あまバ。後世よを絶て無き事ハ。況て御国ふをけはは己ざ有るくも思はれ。然れど書紀よ尸者と書。口訣よ尸者著死衣而謁弔と云はれ。死人の著衣を著て弔よ來とる人よ見ふ人を聞えて。漢此尸とを同のらぬを。漢籍の趣ふはのらて。如此註せは。當時さは風俗の有しふや。然も有まよを尸ふ似とは所もはれば。書紀よ尸者と書れとはも。惡うらぬや。疑むし。とあり。○綿造ハ私記よ。謂今以綿漬水沐浴於死者之人耳也。されど師を其はりの綿の甚少もあらば。故思ふよ。屍のゆるがざらむ料ふ。棺内の空處を上代よを綿してぞ填めらむ其綿を多くいふことあり。

まむ。それ造者を云よや。けまど是らむ。いと定絶ぐとき事ありうし。を云れより。けて嶋を此役ふ任せは。其皆ははどくまて綿を解よ便あるよ取れり。○御食人。師云殯の間死人ふ供る饌を執行ふ人あ。殯よ進奠事書紀よ。天武天皇の崩坐し段り見なとり。けて此役をまよ翠鳥の任は。谷川氏説ふ。能取魚故也と云。此鳥のよく魚の諸書よも見えて。尔雅集注よ。鳩小鳥也。色青翠而食魚。江東呼為水狗。似雀小鳥青也。一名天狗。兼名苑云魚虎と。紀よも。○穴人。私記よ庖丁之類也とい。死に供る獸肉を料理行ふ人あはべし。師を上の御食人と同有まじく。穴人部と云。部の有るふても知るべし。此天皇所思也。紀よ。けて鳥を此役よ任せは。此鳥よく死とは獸の肉見也。

むらを食へむあむ。○凡スデモイコトヲ以衆鳥任事ト云フハ。師説イ。如何カあ依
所以ユエとも慥タカは知られぬと姑ニガく。纂疏ソウソ小雅コヤ有雉禍ウチノコト故
以衆鳥任葬官ス類之也ト云フ。と何依ニも依テ有リあむリ。今云イ。栗田ト
ふ。神代カミヨ鳥の禍コトよて死シる者モノをかく鳥トリどもよ行イはし
災イ。獸の禍コトよて死シる者モノを獸ノ小負コネせて行イをしめし事コトの
有リむむ知チがとし。今世イマノヨよ病ヤミ犬イヌよ喰クれとる者モノ死シる時トキふ
物食モノクふ状カタチも吠ウる声も何ニもさあがら犬イヌの状カタチよありて死シ
ぬることコトを有リハ奇オモシしき事コトある小就コトて思オモふリ。天稚彦アマノハヒコが
高津鳥タカツトリ此殃コトよをりて死シと依ニも依テ雉ウチよ喰クれとるコトふレ非ヒざ
れども射イとる雉ウチの血チ付ツゑる矢ヤふ中ナカりて死シとまレバ雉
み喰クれと依ニも同ナく依レべし。斯カてもし死シる時トキよ鳴ナる声も何
ぬ雉ウチの如ニくふありて死シとるコトよ非ヒざ依レるコトもし然シカるコトあ
らむや。ガて雉ウチぬむ鳥トリども小負コネせて葬ムス事コトを行イむせし
よも有リべし。犬イヌよ喰クれと依ニも依テ者モノ此コト奇オモシしき狀カタチよあまレ就ス
試シす云イありと云イすレ。此コト纂疏ソウソの説セツを助タシべき説セツあまレ就ス
し因ユふ記キ。凡ソレて神代カミヨハ尋常ヨソツネ此意コトを以テは。測ハカるコトがレあレき事コト
し出デ於ケ。

ぞ多加ソドカる。抑オシ天若日子アマノニギハヤヒを前マエも云イふ如ニく。いみじく罪ツミ深コソ
此コト豊トヨの布フども甚オモシく疎ソコして言イ傳ツすレりト見ミゆレむレ。
方カタあくて鳥トリぞをレ事コトを負ネせとるありトも云イふべレぬレ。
と次ツギよ日ヒ八ヤチ夜ヤ遊ユとあ依ニも依テを思オモふレ。然シカのみ事コト欠ケれ
依レ喪ムス此コトさまを云イふ語コトバの勢セツよ非ヒ安ヤス。凡ソレて古コノ文フミを見ミるコトよ。
其コトと云イハ依ニも依テ凡ソレて此コト語コトバの勢セツよ大オホ旨シメ此コト意イをレ知チ
依レくレものぞ。口訣クツケツよ。使シ衆鳥ソウトリ辱ハ尸シ也ト云フ。と云イひレト部ト兼タテ俱タテ説セツふ
上ウヘ古コノ野ノ葬ムスふして鳥トリ小食コクひるありト云イふレあレどレ。や言イれ
例レイのコトあるはちうあき後ノチ世意セノチれまレバ論ロよも足タらばレ。や言イれ
おるは信シよ然シカこをよて。測ハカるコトと死シ事コトふを有リれど。佐藤サトウ信
淵フチ言イふ。鳥獸トリノノといふ中ナカふ。鳥トリ此風コノカゼよ乘ノりて。虚ソラ空カラよ翔トビるを
思オモふレ。本ホよレ天アメ生ナリて天アメよ屬ツき。獸ノを地チふ生ナリて地チよ屬ツき
る物モノと思オモふレ。然シカれむ此コトある衆鳥ソウトリどもは。天アメと因ユむレの御ミ
柱タテと依レ風カゼ神カミふ從ツひ降クりて。天稚日子アマノハヒコが屍カガネを。天アメよ致イタしけ

む故は。其衆鳥を喪事ふ任よるよや。凡て鳥は。風神ふ従ふ物と思ハる。と云ふ。此言の面白く聞ゆるよ就て熟思多ふ信り獸を盡く土よ屬よは物と聞えて伊邪那岐伊邪那美命の因生給子後ふ聞ゆるを。衆鳥はいりも。天ふ生て。天よ屬る物と見えぬ。其はまは天地初發の時よ。伊邪那岐伊邪那美命。御合坐むと坐るふ。其術を。知看さすし。うば。鶺鴒飛來て。其首尾を揺せ。是鳥れ見えぬ。始あるが。此時しも未因土を生給さすし。うば。天とゆあらで。何處とゆの來らむ。但し其飛來まることを。産靈神の産靈よ因らむこと。其処ふ委曲よ註るが如し。第六段此傳を見て知べし。然ま。此を。天使者の始と

や云。けりて上ふ。雉名鳴女を御使り降し賜ひ。今まと喪事ふ衆鳥を任し。まご神武天皇の御世よ。建角見命の八咫是よ依て思牙。同。天皇れ御弓よ止まる。金色此鷄も。天より降まる御使あること。云も更あり。然れむ此二事も。鳥の天使者あは。上ふ。八千矛神の御歌ふ。伊斯多布夜阿麻波勢豆加比とあるは。師説此如く。伊曾伎飛や天馳使ふて。使を虚空飛鳥ふ警給子と聞え。第九十八段の允恭天皇卷よ。輕太子れ御歌ふ。阿麻登夫登理母都加比曾。天飛鳥も。と詠まし。万葉十一よ。妹ふ戀ひ。寐ざは朝明ふ使ぞあり。と詠まし。万葉十一よ。妹ふ戀ひ。寐ざは朝明ふをし鳥れ。是も飛渡る妹が使。十五よ。天飛や鴈を使。得てしが。奈良れ都ふ言告やらむ。あど詠るを思ふよ。

上代小衆鳥を。天使といふ諺の有しおと炳し。あふ允恭

太子、御哥の処了は。是よ因て猶思ふよ。鳥を凡て風神註を見るべし。

小従ふ物と思はる。や云説も實然こや小聞也。そは巨細

よ言ざらむも。衆鳥の有状を熟視とらむるを。誰も自ら

尔思ひ得たむし。○行定而ハ。師云於許那比定米氏と訓

ばし。於許那布と云。事を擬ひ掟るを云て。中昔までも此

例多し。延佳本よ。行多於伎氏と訓るも。意を合へり。凡て於許那布てふ言後世

ふを。重く用牙ども。古ハ軽くも多ク用へ。允恭天

皇紀此歌よ。區茂能於虚奈比と云よみ。古今集よ。た。くも

入土佐日記ふ。米魚れぞ。牙は。たああひた。一本。う。ハ。贈

落窪物語。い。とちて。此を雑色所ぞ。あど定めて。せ

よか。せよ。ね。ぎ。行。ひ。て。直。さ。び。あ。ぎ。見。也。あ。不。此。餘。よ。枕

上。る。こ。と。を。御。格。子。於。許。那。布。と。見。え。源。氏。須。磨。卷。よ。近。き

所。く。の。御。庄。此。於。う。さ。免。し。て。さ。る。べ。き。事。ど。も。あ。ど。良。清

朝。臣。と。あ。き。家。司。よ。て。仰。せ。おこ。あ。ふ。も。あ。れ。あ。り。ね。ど。あ。り。○日八日夜八夜。師云八

日は。八夜。ふ。對。ひ。あ。ま。む。耶。比。と。訓。べ。き。ぐ。如。く。あ。ま。む。も。

猶耶加と訓ばし。倭建命段歌よ。迦賀那倍氏用邇波許

能用。比邇波登袁加袁。これ夜ふ對牙ても。日を伊久加と

云證あ。り。さて八日を古今集あど。耶宇加と見え。常よ

て。古。言。の。正。しち。て。此。二。日。三。日。八。日。十。日。あ。ど。の。加。を。日。數。を。云。言。ふ。て。彼。御。歌。の。迦。賀。那。倍。氏。も。日。く。竝。而。よ。て。日

數を竝べ計ふるを云ふ也。屈並考へあど云加とを氣を
通し云る言よて氣を。經日數の長短を古事記まよ万葉
此歌よ多く氣長と云ひはと毎日多朝爾食爾を多くよ
免る氣是あり。食を借ちてそ此朝爾食爾を或朝爾日
爾ともよ免るを以て氣を日數あるよと我思ひ定免と。
かくて氣を來經の切也と流れ也。來經を云とせば倭建
命段の歌よ見えとゆ。れ亦彼處よ委く云ふ也。景行天皇
月此処也。ちまむ二日三日あど云也。二來經三來經と云
あとい也。師説よ此加を數の畧ありを言れし説を已ろ
日此みち比止加と云燃えいりぬる故よ未思得び
凡てかくる言を神代のまよ此古言あまむ必所由あり

あむ物ぞはと二日七日を布多加那加と云べきを多
を都那を奴と轉し云はと何とあく通音おいひあま
とるものちて日數を計へて幾日せ云うは夜も其中よ
あはべし。ちて日數を計へて幾日せ云うは夜も其中よ
あめれるを。此此如く。八日八夜あどく分て云を古語の
文也。此八日の間夜も晝もせ云意あらむと思ふ人
あき例を鎮火祭祀詞よも夜七夜晝七日。下の夜字今本
思ふべし。鎮火祭祀詞よも夜七夜晝七日。下の夜字今本
ども誤あり元々集ふ引山城風土記ふも神集く而七日
るよ夜と有を用ふべし。山城風土記ふも神集く而七日
七夜樂遊也あ也。ちて此の八も例の弥此意ふてあ幾
も有。○哭遊矣ハ斯奴備阿曾備伎と訓べし。師云遊とは
管絃歌舞とぐひを云て樂字よ當れ也。石屋戸段よも云
よ委く。ちて上代よは殯時よもむ後と樂せしよと。此餘も

古書よ何まゝに見也。幸くを允恭天皇卷天皇崩ちて喪ふ坐し処は註をを見るべし。 如此く樂せしは何の所以ぞと云ふ。まぢ人の死するを。彼天照大御神也。天石屋に隱坐て。世に闇夜よあまゆし。ふ類する故よ。其時れ故事をまねひて。歌樂て其人を復。此世よ還し給子や。招禱る意とて起ます。然るを書紀ふ。哭悲歌へる事此み云て。樂のこを記さまざらば。御罔。れ古禮を忘れて。純小漢さほよ書成されたる物あす。悲歌と此みよて。古意よ背ら依物多や。樂を死人を再還もあろき態を去るあれば。多く悲哥のみふ。非也。思ひ混ふること勿れ。喪ふ樂せむこと有べくも非。比と思ふを漢意あり。其けるも本悲みれ。あまひ。何事うあらむ。凡て古の事を漢罔小例あきをば疑ひて。左右よ言。

百一十

是時味鉏高彦根神昇天而弔。コノトキアヂスキタカヒコネノカミノホリアメニテトブラヒ
 天稚日子出喪出時。天稚日子。アメワカヒコ
 出父母親屬其妻子等。云我子。ガチハ、ウカラヤカラソノメコドモイヒワガコ
 者不死而在矣。我君者不死而。ハズシナテアリケリワガキミハズシナテ

まげて。強て漢よ加あすむとけるを。学者のくせあり。後漢書といふ漢籍よりさへ。皇罔此事を記せるよを。其死停喪十餘日。家人哭泣。不進酒食。而等類就歌舞為樂。といふるものや。

坐矣。而攀牽手足。而。且喜且慟。
矣。其過出由者。此二柱神出。容
姿甚能相似。故是以過出也。於
是阿遲志貴高日子根神大怒。
而。我者愛出朋友出故。弔來耳。

何哉。以吾比穢死人云。而拔御
佩出十掬劍。而切伏其喪屋。以
足蹶離遣矣。此即落而成山。今
在美濃国藍見河出河上。喪山
云山是也。其御刀出名。謂大葉

カリト 亦マタ名ナ謂イフ ヨノヒトイムハヲ イケルヒト アヤマツレニ
列カ神カ度ド 劍ツキ 世人ヨノヒト惡ヒ以ニ生者イ誤ア死シ

者事モノコト此コレ其緣也ソノコトノモトナリ

味鉏高彦根神ハ天稚日子此妻下照比賣の御兄よて事

代主神ふ坐こせ上り註子也第百三段此○弔を登夫良

比と訓はし問と同言れり訊聘諮等の字を登布とも登

し但し登夫を延て登夫良比を云云押を淤曾夫良比と

云ひ引を比許豆良比おと云ふよ同じ第九十八段の傳

○父母親屬也父母宇加良夜加良と訓はし但し此正書

採て記せるが本よ親屬の二字よチハ、ウカラヤカラと訓付と依ち父母宇を脱せるおと疑ふべき今補ひて記せ 神代紀ふ族字宇我邏と訓み顯宗天皇紀ふ屬はと親族安閑天皇紀よ同族おぞ有也師云宇賀良ハ生族う夜賀良ハ家族の意りぬよく考ふはしと有也然めあらむの猶記傳安康天皇卷見るべし○我子者云くた父母の言ふ也○我君者云くハ妻子等此言ふ也師云書紀よ此此君をシナキと訓を付とる古さる称も有あらめど慥ぬる扱も見え例も無れば從ぐとし仁徳天皇段哥ふ阿賀勢能岐美をと免君の轉れるよやちて此妻子どもは天若日子いまど葦原中固ふ降らげゆし以前の妻子ぞ吾れ也○坐矣上ち父の言ある故ふ在らむと云ひ此を妻子等此言ある故

小坐といふ也。○攀牽手足而攀牽ハ古本カ加美加カ
 理と訓るよ従ふ也。古カ信友カ校カとる。万葉四よ戀は
 今はカのカ吾を念カひしを何處カの戀カぞ附見撃有カはと
 十六ふ家カ有し櫃カふ鎖刺し藏カてし。戀カの奴カ此束見戀
 而カあど有て古言カふ也。兒カふも云くはと二十よから衣カ
 有カも此の状カよとく似カとる哥カなり。○且喜且慟カ矣ハ師の
 用呂許備母志麻刀比母志伎と訓れと依カよ従ふ也。○
 過ハ高日子根神を誤カて。天若日子ぞと思カするを云ふ。
 ○容姿を記傳ふ。加本と訓て。加本を先ハ面の形カを
 二云名よて總ての身體カハ形カ様までを兼カと也。書紀よ容姿
 形容貌容カ

どの字を皆然訓るよて心得べし。今世よカ只カ小面カ戎指カて加本といふ也
 も其は違カ牙也。此の二柱神カ此相似カとるも只面の形カ此み
 也。今世人の心カ了カ此容姿をも加本加多知と
 訓て也言足ぬげよ思ふ免カまど然カよあらば。也有れ也。
 猶カあくは加本と此み云てを言足カね也。書紀正書カふ。此神
 容貌正類天稚彦カ也。この容貌を古本カ加本加多知と訓
 依カ小従カひて訓カ也。此も信友カ校カとる古写本カあり。今本
 與天稚彦恰然相カ似カとある形貌カをもカタクと此神形貌カ自
 也言足らば凡て書紀カ小面貌カ顔容カ顔貌カあどを固カよて容
 姿形容カ形姿貌容カあど有カまも師カをカ加本カをカ此カ訓カべ
 き由言れぬカまど加本と也。加多知と也。加本加多知と也。
 訓て也。免カたりて稱。○過之也ハ阿夜麻氏流那理那理
 也。此も有る也。○過之也ハ阿夜麻氏流那理那理
 也。本よ過也と有る師のかく訓て。凡て上カ語
 る事を如此さまよこと己る語也。那理那理と

織るぞ雅文の定りあると云れしよ依まば。そもくかく過て依故を。上件此如く。哭遊べる事。天稚彦の靈此歸に終らしと。物依事れゆしうば。今や來ると待おく有らむよ。いせよく似ふ依神の來坐る故。或は歸り來おと思ひて。取付とるお。○愛朋友之故。宇流波志伎登母賀伎那禮許曾と訓ばし。古事記のハ。愛友故とあり。書紀よを朋友師説よ。神功皇后紀よ。善友やも有。伊勢物語よ。昔男いとう依。とし死友ありら。おどほり。凡て友此交の睦しきをむ。宇流波志と云り。万葉十八。宇流波之美須禮とよ。免るも睦しく交るを云。俗よ云ふ中。と言れしよ依れり。朋

友を書紀よ。登母賀伎と訓る。加伎の義ハ未思得。或説離の義よて。互よ相扶る由。那禮許曾を。那禮婆許曾の意ありと云へり。然も有らむ。那禮許曾を。○甲來耳。記よ。愛友お。波を省きて云ぞ古語此格ある。○甲來耳。故。甲來耳と。何るは。師を耳字を許曾よ當て。愛友那禮上ある之故を。那禮許曾と訓み。耳を都禮よ當て訓べく。文を成せり。師云耳字を能美を訓て。漢文読あり。凡て古言ハ更おも云。中昔の雅文よまでも。語の終よ。能美と云。或は。こと有。こと外し。許曾と云。辞。耳字此意ある。此。事。を。記。傳。首。卷。よ。委。く。い。へ。り。は。と。漢。文。了。ハ。凡。て。來。甲。お。と。來。を。先。小。言。を。御。困。了。は。昔。も。今。も。甲。來。と。云。如。く。凡。て。來。多。下。よ。言。ぞ。定。り。あ。る。此。を。文。書。む。人。此。心。得。よ。云。あ。り。は。て。此。二。柱。神。の。交。遊。ハ。天。稚。日。子。此。因。お。降。て。後。よ。此。事。と。聞。ゆ。下。照。比。賣。此。母。兄。神。お。坐。む。もの。也。も。甚。親。き。

凡也。神名式ふ。出雲国出雲郡よ。阿遲須伎神社。天若日子、
神社と並び載れ也。文徳天皇紀ふ。仁寿元年九月乙酉。殊
擢出雲国阿遲須伎高彦根命授。從五
位下とある也。○比穢死人ハ。師云伎多那伎志爾毘登爾
那蘇布流と訓はし。死人也。垂仁天皇紀ふ。從死とある訓
此如く。決て志爾毘登と訓べく。比も万葉十一ふ。久方
の天光月も隱去ぬ。何ふ名副て妹を憇む。おづく有よ依
て。那蘇布流とは訓也。古今集序ふ云。那須良閑歌も。漢
国此比よ當ま也。此を師云。比穢死人と訓れ。於まど比穢
夜も己ろし。凡て何誰幾おづく。云て。下を夜と終む。終の
と雅文よを無ことあり。漢文読むり。轉れ。近世の俗言
此を師の文よも常。此誤多きハ。いづれぞや。今世よ
此てふ字はを辨知る人あり。古の文をよよく見て悟

ら。ちて書紀注どめよ。阿遲須伎神也。此を中ひ給へ
は。おやれ義不義を。かふのくり論へ。依を甚る。ちき形也
漢国風のさだれぬ。○蹶離遣矣。久惠波那知夜理伎と
訓べし。久惠れおとは既よ註也。第三十二段。離を放字此
の傳見べし。意よて。何處ふまま。往はく。小棄や。依字云。一ツは合する物
を分離。以意よ
らべ。○此とは其蹶放遣とる。窓屋を云。○落而ハ。天よ也
葦原中。国牙あ也。○美濃国ハ。まよ三野とも書也。名義師
説よ眞野れるべしとあ也。此国之事ハ。開化天
皇。卷よ委く云べし。○藍見河
詳れらば。口訣よ。厚見郡也と云ふは。其頃までは。慥し此
名の川あ也。しふや。和名抄よ不破郡ふ藍川と云郷あ也。

○河上。此も上此肥河上の例ふ依て。加波加美と訓る。加波良と云。加波乃倍とも訓。宇赤まども山の在所を川以て云む。其山を其川に流す。在を川大よて山いと小うら多うこそさも云べし。川もいとしも大から流山も宜き。不どおらむ。云は云流うら流。今を藍見川め。喪山も詳れら流。まはハ水源。○喪山も詳あら流。或と云む。ぞあべてのこせれるべき。○藍見川を不破郡府中村の藍川是あり。喪山は其藍川の上。送葬山と云ある。是ありと云。○猶とく囚人ふ尋ねべし。松下氏が今の僧都山あり。喪音を訛れるあり。近々まむ。一山や。まよ万葉九よ。母山ふ霞とあ引云。とあ流ハ八雲御抄。美濃とある。ふ付て。此喪山や有む。と契沖云。此哥ハ近江湖。舟より見放てと流。あまむ。美濃を隣國あまむ。物遠く聞也。まよ美濃國の或人云。武義郡大矢田村。天王山と云あり。去を喪山ありと云。まよ飛彈國。ふ荒城郡荒城郷荒城神社もあ

り。上代よを同國ありし。後よ隣國をなれる類多うま。は。是らふも心を付べし。まよ信濃の岐嶺にありも。古を美濃國ありし。うば。○大葉川を古事記ふは大量と彼。辺よても尋ね流し。○大葉川を古事記ふは大量と書。共ふ大波加理と。波も加も清て讀べし。記傳よ。書紀里とあまむ。彼を我を濁流。まよ。此記ふを。量字を借て書ま。加と清て讀べし。とあれ。書紀の清濁字を。さしも。扱と流る。ちて名義を。大刃川ある流し。お上上の都牟川。之。大刃。此處を考合に流し。第七十段。此。○神度。劍を。師云。加茂翁。説ふ。神を例の布。免て云言。度を利ありと云れし。ちも有あむ。然らバ。度。此。下。ふ。之。ちて出雲國。ふ。神門。郡と云あり。此。劍。字。此。地。より。出。る。故。よ。名。く。と。云。説。を。己。ろ。由。縁。あ。ま。む。そ。を。返。て。郡。名。を。此。劍。を。り。出。は。と。越。中。國。於。る。も。知。が。と。し。風。土。記。此。郡。名。説。を。別。あり。は。と。越。中。國。

新川郡ふ神度神社。今云和名抄よ同郡よ布但馬因氣多郡よ神門神社あり。○世、人惡以生者誤死者事此其縁也。谷川氏が好生惡死人情之常而以貌之肖誤之者世或有之故爲其縁也と云ふ如し。

此味鉏高彦根神容儀華艷而。

映于二止二谷出間矣其赫然

而飛去出時其伊呂妹高比賣

命思顯其御名而歌曰阿米那

流夜淤登多那婆多能宇那賀

世流多麻能美須麻流美須麻

流邇阿那陀麻波夜美多邇布

多和多良須阿治志貴多迦比

古泥能迦微曾也。此歌者夷振

也。一傳云。又歌曰。阿麻佐加流。

比那都賣能伊和。多羅須勢。

杼伊志加波加。多布知加。多布。

知。邇。阿彌波理。和。多。斯。米。呂。余。

加。多。布。知。此。兩。首。者。今。號。夷。曲。

也。

華艶ハ。本よ宇流波志久と訓るふ従ふ也。本は華字常

るを誤あり。今を師の校らまると一本よれり。○二丘二谷ハ。上よ谿八谷峽ハ

尾と何依と同例ふて。丘二尾谷二谿をいふ。○映矣也。氏

理和多羅志伎と訓る。歌よ美多邇布多和多良須とよ

免依即是あ。惣を申ひて天よ昇給ふも。今忿て飛去給

ふも。共了御魂の進免る時あまむ。如此光映とるふれ也。

凡て貴死神とち此御魂此進み給ふ時よ。御體の光給ふ

あとを。既よ委く論へべき。第二十九段の○赫然也。於母

本傳理氏と訓る。本よ赫然作色。慍色。面火照此意よて。

怒れる顔色を云ふと既よも註へゆ。第四十段。ちて此を

古事記^{イカリテ}了^{イカリテ}。忿^{イカリテ}而^{イカリテ}と^{イカリテ}ほ^{イカリテ}る^{イカリテ}ふ^{イカリテ}付^{イカリテ}て。師云。上^{イカリテ}ふ^{イカリテ}既^{イカリテ}了^{イカリテ}。大怒^{イカリテ}と^{イカリテ}あ^{イカリテ}は^{イカリテ}を^{イカリテ}は^{イカリテ}と^{イカリテ}更^{イカリテ}よ^{イカリテ}か^{イカリテ}く^{イカリテ}云^{イカリテ}は^{イカリテ}を^{イカリテ}。終^{イカリテ}よ^{イカリテ}心^{イカリテ}解^{イカリテ}空^{イカリテ}。怒^{イカリテ}ま^{イカリテ}る^{イカリテ}は^{イカリテ}く^{イカリテ}よ^{イカリテ}て
還^{イカリテ}坐^{イカリテ}し^{イカリテ}由^{イカリテ}ふ^{イカリテ}て。喪^{イカリテ}ふ^{イカリテ}會^{イカリテ}牙^{イカリテ}る^{イカリテ}神^{イカリテ}等^{イカリテ}ふ^{イカリテ}。辭^{イカリテ}言^{イカリテ}を^{イカリテ}も^{イカリテ}せ^{イカリテ}じ^{イカリテ}各^{イカリテ}告^{イカリテ}を^{イカリテ}
も^{イカリテ}爲^{イカリテ}賜^{イカリテ}ざ^{イカリテ}り^{イカリテ}し^{イカリテ}意^{イカリテ}を^{イカリテ}。此^{イカリテ}言^{イカリテ}よ^{イカリテ}含^{イカリテ}め^{イカリテ}て。次^{イカリテ}此^{イカリテ}思^{イカリテ}顯^{イカリテ}其^{イカリテ}御^{イカリテ}名^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}
處^{イカリテ}ふ^{イカリテ}。應^{イカリテ}う^{イカリテ}せ^{イカリテ}ぬ^{イカリテ}る^{イカリテ}物^{イカリテ}あ^{イカリテ}り^{イカリテ}。凡^{イカリテ}て^{イカリテ}古^{イカリテ}事^{イカリテ}記^{イカリテ}の^{イカリテ}文^{イカリテ}を^{イカリテ}大^{イカリテ}抵^{イカリテ}古^{イカリテ}傳^{イカリテ}の^{イカリテ}
心^{イカリテ}を^{イカリテ}。ち^{イカリテ}て^{イカリテ}還^{イカリテ}と^{イカリテ}も^{イカリテ}罷^{イカリテ}と^{イカリテ}め^{イカリテ}い^{イカリテ}は^{イカリテ}で^{イカリテ}。飛^{イカリテ}去^{イカリテ}と^{イカリテ}し^{イカリテ}も^{イカリテ}云^{イカリテ}る^{イカリテ}是^{イカリテ}も^{イカリテ}
忿^{イカリテ}て^{イカリテ}速^{イカリテ}よ^{イカリテ}去^{イカリテ}賜^{イカリテ}ふ^{イカリテ}と^{イカリテ}し^{イカリテ}ぬ^{イカリテ}め^{イカリテ}。但^{イカリテ}し^{イカリテ}飛^{イカリテ}ハ^{イカリテ}家^{イカリテ}よ^{イカリテ}鳥^{イカリテ}の^{イカリテ}如^{イカリテ}く^{イカリテ}空^{イカリテ}を^{イカリテ}
飛^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}ふ^{イカリテ}た^{イカリテ}非^{イカリテ}空^{イカリテ}落^{イカリテ}窪^{イカリテ}物^{イカリテ}語^{イカリテ}よ^{イカリテ}。飛^{イカリテ}や^{イカリテ}う^{イカリテ}よ^{イカリテ}し^{イカリテ}て^{イカリテ}出^{イカリテ}と^{イカリテ}ま^{イカリテ}ひ^{イカリテ}
ぬ^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}ひ^{イカリテ}常^{イカリテ}よ^{イカリテ}も^{イカリテ}速^{イカリテ}行^{イカリテ}を^{イカリテ}飛^{イカリテ}で^{イカリテ}行^{イカリテ}く^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}を^{イカリテ}異^{イカリテ}あ^{イカリテ}り^{イカリテ}。○
伊^{イカリテ}呂^{イカリテ}妹^{イカリテ}を^{イカリテ}師^{イカリテ}云^{イカリテ}伊^{イカリテ}呂^{イカリテ}毛^{イカリテ}と^{イカリテ}訓^{イカリテ}べ^{イカリテ}し^{イカリテ}。同^{イカリテ}母^{イカリテ}妹^{イカリテ}を^{イカリテ}云^{イカリテ}ぬ^{イカリテ}め^{イカリテ}。ま^{イカリテ}が^{イカリテ}凡^{イカリテ}
て^{イカリテ}古^{イカリテ}よ^{イカリテ}兄^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}稱^{イカリテ}呼^{イカリテ}よ^{イカリテ}。男^{イカリテ}弟^{イカリテ}女^{イカリテ}弟^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}牙^{イカリテ}て^{イカリテ}男^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}勢^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}

阿^{イカリテ}爾^{イカリテ}と^{イカリテ}も^{イカリテ}云^{イカリテ}ふ^{イカリテ}。此^{イカリテ}を^{イカリテ}常^{イカリテ}の^{イカリテ}如^{イカリテ}し^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。男^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}勢^{イカリテ}と^{イカリテ}
云^{イカリテ}。須^{イカリテ}佐^{イカリテ}之^{イカリテ}男^{イカリテ}命^{イカリテ}此^{イカリテ}み^{イカリテ}が^{イカリテ}う^{イカリテ}ら^{イカリテ}天^{イカリテ}照^{イカリテ}大^{イカリテ}御^{イカリテ}神^{イカリテ}の^{イカリテ}伊^{イカリテ}呂^{イカリテ}勢^{イカリテ}と^{イカリテ}詔^{イカリテ}
を^{イカリテ}於^{イカリテ}登^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}こと^{イカリテ}を^{イカリテ}無^{イカリテ}り^{イカリテ}。ち^{イカリテ}て^{イカリテ}女^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}阿^{イカリテ}泥^{イカリテ}
き^{イカリテ}。此^{イカリテ}を^{イカリテ}後^{イカリテ}世^{イカリテ}を^{イカリテ}異^{イカリテ}あ^{イカリテ}り^{イカリテ}。ち^{イカリテ}て^{イカリテ}女^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}阿^{イカリテ}泥^{イカリテ}
を^{イカリテ}い^{イカリテ}ひ^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}男^{イカリテ}弟^{イカリテ}此^{イカリテ}み^{イカリテ}が^{イカリテ}の^{イカリテ}ら^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}指^{イカリテ}さ^{イカリテ}す^{イカリテ}も^{イカリテ}。阿^{イカリテ}泥^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}。但^{イカリテ}し^{イカリテ}男^{イカリテ}弟^{イカリテ}の^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}阿^{イカリテ}泥^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}。み^{イカリテ}が^{イカリテ}う^{イカリテ}ら^{イカリテ}呼^{イカリテ}と^{イカリテ}き^{イカリテ}の^{イカリテ}あ^{イカリテ}と^{イカリテ}
あり^{イカリテ}。傍^{イカリテ}よ^{イカリテ}り^{イカリテ}。男^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}は^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}も^{イカリテ}伊^{イカリテ}毛^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}り^{イカリテ}。中^{イカリテ}
昔^{イカリテ}ま^{イカリテ}で^{イカリテ}も^{イカリテ}然^{イカリテ}り^{イカリテ}。此^{イカリテ}。ち^{イカリテ}て^{イカリテ}男^{イカリテ}兄^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}牙^{イカリテ}て^{イカリテ}。男^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}於^{イカリテ}登^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}ひ^{イカリテ}。
此^{イカリテ}ハ^{イカリテ}常^{イカリテ}の^{イカリテ}如^{イカリテ}し^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。男^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}牙^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}弟^{イカリテ}
弟^{イカリテ}を^{イカリテ}於^{イカリテ}登^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}こと^{イカリテ}を^{イカリテ}あ^{イカリテ}り^{イカリテ}き^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}女^{イカリテ}兄^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}牙^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}弟^{イカリテ}
も^{イカリテ}於^{イカリテ}登^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}。中^{イカリテ}昔^{イカリテ}ま^{イカリテ}で^{イカリテ}も^{イカリテ}然^{イカリテ}り^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}弟^{イカリテ}
異^{イカリテ}あ^{イカリテ}。ち^{イカリテ}て^{イカリテ}男^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}弟^{イカリテ}伊^{イカリテ}毛^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}ふ^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}を^{イカリテ}對^{イカリテ}
牙^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}弟^{イカリテ}を^{イカリテ}伊^{イカリテ}毛^{イカリテ}と^{イカリテ}云^{イカリテ}ふ^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}男^{イカリテ}弟^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}も^{イカリテ}伊^{イカリテ}毛^{イカリテ}
云^{イカリテ}ふ^{イカリテ}こと^{イカリテ}は^{イカリテ}無^{イカリテ}り^{イカリテ}き^{イカリテ}。は^{イカリテ}と^{イカリテ}男^{イカリテ}弟^{イカリテ}小^{イカリテ}對^{イカリテ}へ^{イカリテ}て^{イカリテ}。女^{イカリテ}兄^{イカリテ}も^{イカリテ}伊^{イカリテ}毛^{イカリテ}

云云。此を後世カス。斯てまゝ同母兄弟此間よてを勢を伊呂勢阿泥を伊呂泥。阿泥の阿を省きて泥と云あり。例を古事記黒田宮段小伊呂泥をありて。書紀ハ某姉と書れり。ちて泥と云を。もとは男女よ。とまゝの稱りて。男名よも負ゆ。此事淨穴宮段小云り。然るを阿泥の阿を省きて。同於登を伊呂杼。於登の於を省母姉も伊呂泥と云あり。連く音便あり。例を黒田宮。段小伊呂杼とあり。記中よ伊呂弟とあり。せも常小云云。此等よ準ふ依小。同母兄弟對りて。女弟をば伊呂毛を云々。むこを決し。阿泥を伊呂泥。於登を伊呂杼と云例。故今然訓るあり。凡多古小兄弟稱呼る名ども男と。如くよして。後世の格をハ異ふること多し。委曲よ己き。万へ委を誤る。書紀此訓和名抄あり。古イ合グと。きこと混れり。よくく。はて凡て伊呂と云ふ言れ義也。と死と死て取べきあり。はて凡て伊呂と云ふ言れ義也。

淨穴宮段よ云。安寧天皇卷。高比賣命ハ下照比賣の一名あり。前小見也。第百段の傳。此比賣の今かく天小坐る也。天稚日子此屍を天よ致せると死ふ。其よ副て昇らせると依べし。思顯其御名而せむ。此喪イ會集る天稚日子此父母。まよ妻子親族ハ天上の神等おれむ。此阿遲志貴神をむ。見知ざるよ。如此怒りて。終よ名告をもせ。びて。飛去云給ひ終依故小。誰しの神とも被知て。止おむ。おとの遺恨さふ。御名を令知む。せむを思せる。伊呂妹此心ハ。誠よはも有ぬべき物ぞ。○阿米那流夜ハ。師云天在よて。夜を助辭あり。師も久老も天若日子の巻を。古事記よむ。此固よて此事と。

し書紀よち天上よての事とほまど天上よして更よ何
米れりやとハ云ほき小非ほむ此固ふての事とせる傳
牙や正うらむを言れおまど天上あらむらよ天在哉
とはあど加言ざらむ況て下照比賣ハ下津國の神ある
が今始めて昇ませるあまむ下津國よて常小云あ
らへるほくよ詠るとせむよ何でふこむ有む 万葉
三よ天有佐く羅能小野之云く七よ天有日賣菅原十一
ふ天有一棚橋十六よ天尔在哉神樂良之小野爾あども
何也。○淤登多那婆多能ハ弟棚機之あ也。如此さはよ云
淤登は人此季子を淤登子と云其淤登あり少女の意ふ
註せるハ非
あり少女ハ袁登賣催馬樂の我門よ淤登牟須賣まと葦
刈まバ音異あり
垣よ淤登與賣れど何るも是あり抑季子ハ父母よ殊ふ
愛まほく物ある故よそまを也轉りて必しも季子あら

れども賞愛まほく意よてあはて美女あををぬ淤登某
ぞぞ云るむ此も然ありはまむ右の催馬樂れる毛必し
ぬ季女季男此婦れらびとも然は云てむか此我門哥よ
た我名を知ら
く欲のらバ云く何や此郡の大領此まあむはめと云
牙たとむはめとい牙と何まバ案よ季女よもあま自ら
かく名告れる意を愛みくしおろけ女子ある由あり
然れむ必しも季女あらびとも云べしはと葦垣れる毛
其哥の意さどうれら後バ定まてを云ぐあらまど其詞
よやぐろるは依此家のたをよ知をあ也やぐろけるハ世
よ名高く聞えとる意と聞ゆまむこれ 棚機ハ機織女を
も人小賞愛まほく意よても有あむ 棚機ハ機織女を
いふ万葉此歌小棚機津女とぬ棚機ともとぬ今云棚
機今云棚
機の季
きことち第四十八段天棚機比はて此了弟棚機を先出
賣命の処よ註せるを見るべしはて此了弟棚機を先出
せ依ち次小玉の美麗を云む料あ也さ依ち上代よは凡

て玉字以て身よ飾れる中よも機織女は殊よ手よも足
よめ玉を飾りしうむあす。今云此事ハ第百四十六段一
はて玉の美麗を云む料ふ先其女此可愛き由ふ淤登と
云はと凡て人め物も天上此を優れて美麗死故。天在
ややも置るれ。今云久老グ日本紀哥解よ音棚機とせ
とあり。○宇那賀世流は師云契冲説よ所嬰あす日本紀
ふ以其頸所嬰五百箇御統之瓊云々万葉十六。吾宇奈
雅流珠乃七條とと終めと云す。宇那牙流を延て宇那賀
世流と云は古言此常あす。世流と云あどく同格れ。波加
儲そを書紀口訣ふ頸よ嬰るを云むいす。宇那を和名

抄よ項頸後也。和名宇奈之と何は是あす。部處女等纓有
領中文光蟹とある。纓有をもウナガセルとあす頸よ玉
訓べし。今本よマツヒタルと訓るを非れり。○多麻
懸しあやは上の御頸珠此處よ云ゆ。第二十九段。○多麻
能美須麻流ハ王之御統あす。御統此こと上よ出。第三十
傳見る。○美須麻流通師云凡て歌ふ物を同じあやを再
返あめし。又かく聯て疊もはるハ昔め今も同じことれ
す。信ふ此歌あどもかく疊と依よてあそ。調ハ宜ルま。紀書
よ。第四句の終よ。迺字添りて此句の無きた。同言ある
故。後よ誤りて美須麻流の四字を脱せるあり。或ハ古
哥のさまを知らぬ。後世心よ。同言此重あま依を衍と見
て。ち々しらよ削す。しふも有べし。濱成式と云物も他
麻能美須麻呂美。ちて通ハ。八坂瓊れどの瓊あす。書紀
須麻呂能とあり。

は廻せある。何よても宜し死中ふ。廻れ方は今少し勝りて聞也。○阿那陀麻波夜師云玉を穴穿ちて。緒を通じ物あれむ。穴王と云を契沖もい牙依信小さ依ことれぬ。阿那を歎辞とけ。但し穴王と云こそ。此他よ例も見事。はる説を非あり。ぬ玉の光れ美死を云むよ。其穴を言舉むこそ。何の由無く聞えて疑むし。故思ふ。阿加陀麻を誤れるよを非じり。赤玉を古哥よあると見えて。豊玉毘賣命の御哥お那と字此や。似とる故り誤れる。はと同韻おまむ。本うとひ訛れるよも有あむ。さまど書紀ふも。阿奈とあまば。ぬとひ誤。おめ何ま。古事記お。ちて上よ玉之といひ。瓊と云て。はと此り玉と云る。如此同じ事を。ちまぐよ長

長を聯ね云む。古言れ美きあり。大祓祠よ。荒津の津乃ハ百會と云るおど。さて波夜を。光映よ。照曜くを云れ。思ひ合はべし。延と夜を。通音れがら。波延と云べきを。波夜かの速玉をて。何とや。ねどや。うあら。げ聞ゆ。おれど。之男神式よ。熊野早玉神社れど。此波夜も。映玉れ意あるを思ふ。速早あど。おみお借字あり。玉はとかの羽明玉の羽も映の意れ。はと万葉十七ふ。多麻波夜須と云言も。何依。是も玉映を云こそ。由を延て。夜須と云む。古言れ。ちて万葉お。此を武庫の枕詞とせむ。玉映む。し。死と云。愛く思ふを。古。ちて此句は。穴玉れ如く。光映て。をいふ意お。添て心得るを。常此事れり。此波夜て。ふ言は。一

首^{ウタ}此^{コト}眼^メあ^ハ。是^レを惡^ク心得^テ。凡^ソて歌^ノの意^{コト}明^カうあら^ハ。とく味^ミふ^シ。今^{イマ}云^フあ^ハ不^レ此^{コト}。此^レ波^{ナミ}夜^ヨを契^セ冲^ツガ者^ノ哉^ヤの義^ミ。予^カる歎^{ナク}辭^ハと一^{ヒツ}義^ミよ思^ハむも非^ズある由^ユを委^ク。○美^ミ多^タ邇^ニは。三^ミ音^ミ一^{ヒツ}句^クあ^ハ。契^セ冲^ツ云^フ眞^{マコト}谷^{タニ}あ^ハ。万^{マン}葉^{エフ}ふ眞^{マコト}草^{クサ}をみ^ミくさ。三^ミ熊^{クマ}野^ノを眞^{マコト}熊^{クマ}野^ノとも詠^ユる。麻^{アサ}と美^ミを通^ツ音^ネある故^ユなり。然^{シカ}れど。美^ミ山^{ヤマ}も眞^{マコト}山^{ヤマ}の意^{コト}あ^ハ。味^ミべ^シ。美^ミ多^タ邇^ニも準^スへて知^ルべ^シ。○布^フ多^タ和^ワ多^タ良^ラ須^スハ。二^ニ巨^{コト}良^ラ須^スあ^ハ。和^ワ多^タ流^{リウ}を延^ビ多^ク。和^ワ多^タ良^ラ須^スとい^フ予^カ。師^シ云^フ此^レ二^ニ句^ク也^ヤ。阿^ア遲^チ志^シ貴^キ神^{カミ}の身^ミ此^レ光^ヒの。一^{ヒツ}谷^{タニ}を越^コて。二^ニ谷^{タニ}まで照^テ至^スるを云^フ。上^{ウヘ}よ映^ヒ于^ニ二^ニ丘^{ツタ}二^ニ谷^{タニ}之間^ノと^ハ味^ミ即^チ是^レあ^ハ。二^ニ谷^{タニ}とい^フ予^カ。其^レ中^ノよ二^ニ丘^{ツタ}はこ^トも

ま^スる故^ユ。即^チ二^ニ丘^{ツタ}二^ニ谷^{タニ}あり。け^レて此^レ句^クよ^テ語^{コト}を絶^キて心^{ココロ}得^ルべ^シ。此^レ句^クま^スて。我^ガも人^ニめ。皆^ニ目^メ前^{マヘ}見^ルと^ル状^{サマ}云^フ。よ^テ。次^{ツギ}也^ヤ。是^レハ阿^ア遲^チ志^シ貴^キ神^{カミ}ぞ^ト。言^ハ聞^キせ^シ味^ミ意^イあ^ハれ^ルなり。次^{ツギ}句^ク引^ヒ續^ケけ終^ハの曾^{ソウ}也^ヤ。て^シふ辭^ジ此^レ二^ニ句^クまで^シ係^ル。○阿^ア治^ヂ志^シ貴^キ。四^シ言^{ゴン}一^{ヒツ}句^クなり。○多^タ迦^カ比^ヒ古^コ泥^ネ能^ネ。六^{ロク}音^{オン}一^{ヒツ}句^クあ^ハ。○迦^カ微^ミ曾^{ソウ}也^ヤ。師^シ云^フ四^シ音^{オン}一^{ヒツ}句^クあ^ハ。書^{シヤク}紀^キハ能^ネ迦^カ微^ミ曾^{ソウ}也^ヤの五^ゴ字^ジあり。曾^{ソウ}也^ヤハ。き^キよ因^ユて。能^ネ迦^カ微^ミて^シふ言^{ゴン}も味^ミあ^ハれ^ルなり。句^クハ調^{テウ}み^ミか^カき^キ。其^レ多^タ加^カ比^ヒ古^コ泥^ネ能^ネ加^カ微^ミと云^フて^シハ。八^{ハチ}音^{オン}あ^ハま^スむ。一^{ヒツ}句^クなり。其^レ正^{テイ}加^カ微^ミを分^ワま^スむ。二^ニ音^{オン}よ^テ。一^{ヒツ}句^クよ足^{ソク}ざ^ザれ^ル。は^ハあり。濱^{ハシ}成^{セイ}式^{シキ}よ。阿^ア遲^チ須^ス岐^キ能^ネ可^カ味^ミとあり。是^レも一^{ヒツ}の傳^{デン}り^テ。句^クの調^{テウ}よ。依^ヨりて。高^{タカ}彦^{ヒコ}根^ネの五^ゴ音^{オン}を省^{シヤウ}なり。凡^ソて哥^カハ調^{テウ}ハ一^{ヒツ}句^ク三^{サン}音^{オン}と^ハ。七^{シチ}音^{オン}まで^シ限^リれ^ルことよ^テ。上^{ウヘ}代^{ダイ}の哥^カと^モい^ハさ。ち^チも漫^{マン}了^{リョウ}せ^シ。心^{ココロ}を任^ニせて。一^{ヒツ}句^クを八^{ハチ}音^{オン}九^ク音^{オン}も^モよ。の哥^カよ^ハむ^シを見^ミれ^ル。心^{ココロ}を任^ニせて。一^{ヒツ}句^クを八^{ハチ}音^{オン}九^ク音^{オン}も^モよ。

みてそを中ナカくよ古コ躰タマぞと
思ふたいと漫マンありくし。ちて曾ソウ也ヤを今世の心ココロをよ
く聞えて疑ウタガハシも外ソトハまぞ古語古歌よも未見ミタラズのあらぬ辭
外ソト也ヤ字を假字カゼふ用ヨウするを古事記コトヰよ例あり。故
歌を曾ソウとせめて也ヤ云イハばても歌ウタ此意コノイを同じナニ。さまむ也ヤ
面の助字タマシよ置オケるばくりのとを思オモはるまど哥カの下シタよ然
助字を置オケる例タマシをと無ナシれむ定サダメ難ガタシくて姑ニヤく曾ソウ也ヤてふ辭
としちて一首ヒトクサ此意コノイをとわして云イハはる。天アメあは愛アイしき機
織オリ女メ此コノ頸ネよ嬰カケする美麗ウツクシ王キミ此コノ如トシくふ光ヒカ也ヤ映ユキて二谷フタニまで
照テリする此コノ神カミを阿治志貴アヂシキ神カミぞと云イハはる也ヤ。○此歌者コノウタノ夷振ヒナブリ
也ヤ。此事コトハ下シタふ夷曲ヒナブリとあは處トコロふ註ツキふばし。○又歌曰マタウタハクハク。あの一傳ヒトツタヘよ。此歌コノウタをも下照比賣シタテヒメの歌ウタなりとせむを誤アヤマるこ

と師ウシの委オモく辨ワカられするを。下シタよ注ツキはる如トシし。然シカドまど説セツ淺セン
遺ウツク憾カンくて舉アゲはるこ。○阿麻佐加流アマサカハハ天離アメリよて夷ヒナ此發コノハツク
既スデに徴シメよい有りき。○阿麻佐加流アマサカハハ天離アメリよて夷ヒナ此發コノハツク
語コトあり。其ソノ冠辭カウジ考カウよ。万葉一マンヤクヒトふ天離アメリ夷ヒナ者モノ雖イハ有アル石走淡海イハシロフツ
因ユヰ乃ノ三ミよ天離アメリ夷ヒナ之ノ長道ナガミチ從ユク戀コヒ來クレ者モノ十五ヒトイハよ安麻射可流ヤマサカハ比
奈ナ乃ノ奈我道ナガミチ乎ヤ云イハく。此コノ冠辭カウジあり。あを都方ミヤコカタとめ。鄙ヒノの因ユヰを望ノゾ
免メば天アメと共に遠トホ放ハクて見ミゆる由ユよて冠カウせよ也ヤ。佐加流サカハと
避サヘ也ヤ放ハクれて遠トホきを云イハく古事記コトヰよ奥疎オクソ神訓カミノツクシ疎ソ云イハく奢セ加留カと
見ミえ万葉十三マンヤクヒト夷ヒナ離リ因ユヰ治チ爾ニ登ノボ一ヒト云イハく天疎アメソ夷ヒナ治チ爾ニ等トあり
集中シュウジュウ中ナカよ里放サカハ澳放オクハク振離ヒナ見ミ放ハクあどあるも佐加流サカハハ同じ語
あり。○今云イマイハく岡部翁オカベノオノも師ウシも天佐加流アメサカハの佐サを濁音ナグナミと定サダメら
れとまど是コノも清濁セイダク互タガヒよいへり也ヤ。○比那都賣ヒナツメ能ノハ鄙ヒノ女メ
聞キゆれむ予ヨは然シカドしめ拘カウむらび。○伊和多羅須勢イタダロソセ埒ラ也ヤ。
之コノ外ソト也ヤ。比那ヒナてふ語コトの義タマシハ雄略オウリョク天アメ皇ミコ卷マキよ註ツキせるを見ミべし。

伊渡良須瀨門イワタラヌセカドよて伊を冠イとる語コト。久老説コウラよ此伊在ココイの
在イかよはしあどの在イは同ドウ渡を延ノボて渡良須イワタラヌとい牙イハ也。万
葉九小大橋之上オホハシノウヘ從直獨ユキナリ伊渡爲兒者イワタラヌコハ云くやほ也。瀨門の
門カド水門河門ミヅカドカハカドあざの門カドよて万葉十六マンヤクジュウロク角嶋之迫門ツノシマノセカド乃
稚海藻者ワカウヅノハ云くとある迫門セカドふ同じ。○伊志加波イシカハハ石川イシガハよ
て石多死川イシタシガハをいふ。○加多布知カタブチを片淵カタフチあり久老説コウラよ一
方ヒトカタ小石コイシあまきバ一方ヒトカタを淵フチある物モノあるをヲかく言イハる也。と
云牙イハ也。栗田土麻呂クリタツマロ説トクよ石多イシタき川カハをウれらば。○加多布
知チ通トウハ片淵カタフチありぬり。上句ウヘノクを疊カサねて其淵ミノフチふと云イハ意イあり。○
阿彌波理和アミハレワ多斯タシを網張アミハリ巨オホ也。○米呂メロ余斯ヨシ通トウ也。師シ云イハ米

也。網アミの目メ呂ロハ助辭サケコト余斯ヨシ通トウハ寄ヨセふ也。儲サケ是コレまで八句ヤチクは
余斯ヨシ余理許禰ヨリヨメを云イハむとて此序ココノシあり。○余斯ヨシ余理許禰ヨリヨメ也。
師シ云イハ寄ヨセ依來ヨリキとぬ也。万葉九マンヤクク妻ツメ依來ヨリキ西尼セニまマと十四ジュウシよ都
麻余マヨ之許ノヨメ西禰セニあどあるを以ヨリて悟サトる也。○伊イ斯シ加波カハ句
加多布知カタブチ此ココを上の詞ウノコトを立返タテカエりて歌ウタふ古コの例コトふて歌ウタの
意イよを係カケはらぬ事コト也。○此ココ兩首フタウタと云イハ本文ホンモンあ依ヨ歌カと。此
歌ウタを兩首フタウタをいふ。○夷曲ヒナガキと云イハ師シ云イハ凡ソトて歌ウタを記シして此者ココノモノ
某振也ナニノアツリ。まマと某歌也ナニノウタナリと云イハる也。古事記コトワザキよ多オホしその某振ナニノアツリ
とあるは此夷振ヒナアツリの外ソノト允恭天皇ニギハヤヒ卷マキふ宮人振ミヤヒトアツリ天田振アマタアツリあ
也。聖武天皇オホセ紀天平六年キテイヘイニ二月ニ歌垣ウタカキの中ナカ難波曲ナニハ倭部曲ヤマトノク

淺茅原曲廣瀨曲八裳刺曲おど云名あ也古今集大歌所

歌よ近江ぶ也水莖ぶ也四極山ぶ也何れ。次は某歌と云

建命段の片哥れ処よ。儲かく某振某歌と云て皆後よ。樂

取まほて註を見べし。今号夷曲とある。今号字を以ても後

府ふて呼ぶ名あ也。今号夷曲とある。今号字を以ても後

佐と云て雅樂寮の訓樂府と書る字を神武天皇紀來目

哥の下よ。今樂府奏此歌者云くや有よれり。但しトヨ

ノアカリと訓るを。樂府よ何ら彼をもウタマヒノ

ツカサぞこそ訓べし。まはて雅樂寮大歌所樂所内教坊

あどの類これ樂府と云べし。上。抑古事記書紀おどよ載

代りもさる官所ありしあ也。抑古事記書紀おどよ載

まゆ歌を。何まも上代の多く此歌の中よも優れて美き

かぎ也形まむ多くは樂府よめ取れて。管絃ふゆけ。儻り

め合せて。奏し歌どもあ也。其中ふ某振と呼む。まお振と

は。俗ふいふ形状進止の布理うて。人よはれ物よまま。動

く貌を云て。歌うてを。奏ふ音聲れ長短巨細低昂おどの

貌あ也。振字を先ハ借字あまども。五此物よ。動き舉るを

まバ布理てふ言よを正字れり。曲と書れとるを。哥ふ付

てむさるることあまども。布理てふ言の意よハうとし。

はて樂府ふ用る歌を。奏ふよ種く此振あゆ故ふ。其振く

ふ各名を付て。某振とは云あ也。但し其名は。其振を以て

負とる物ふを非也。故夷振と云も。夷てふ名を。其振よを

振よを。其歌の首れ詞を取て。假ふ名けとゆ物あ也。

彼宮人振天田振。田を借は。古今集あゆれど皆然れり。

考へ見ほし。然るを某振と云て。其処の風俗哥曲あ也と

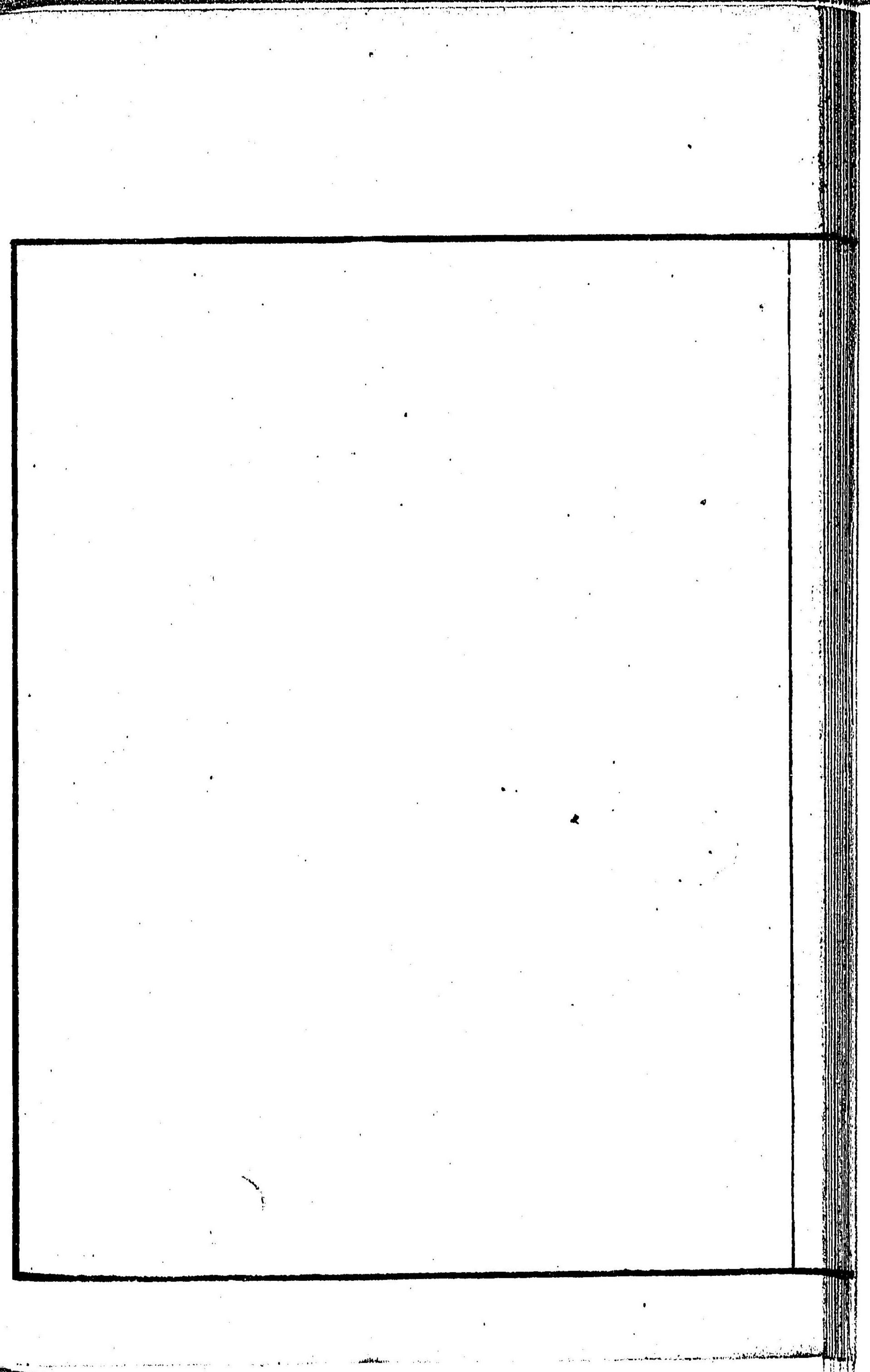
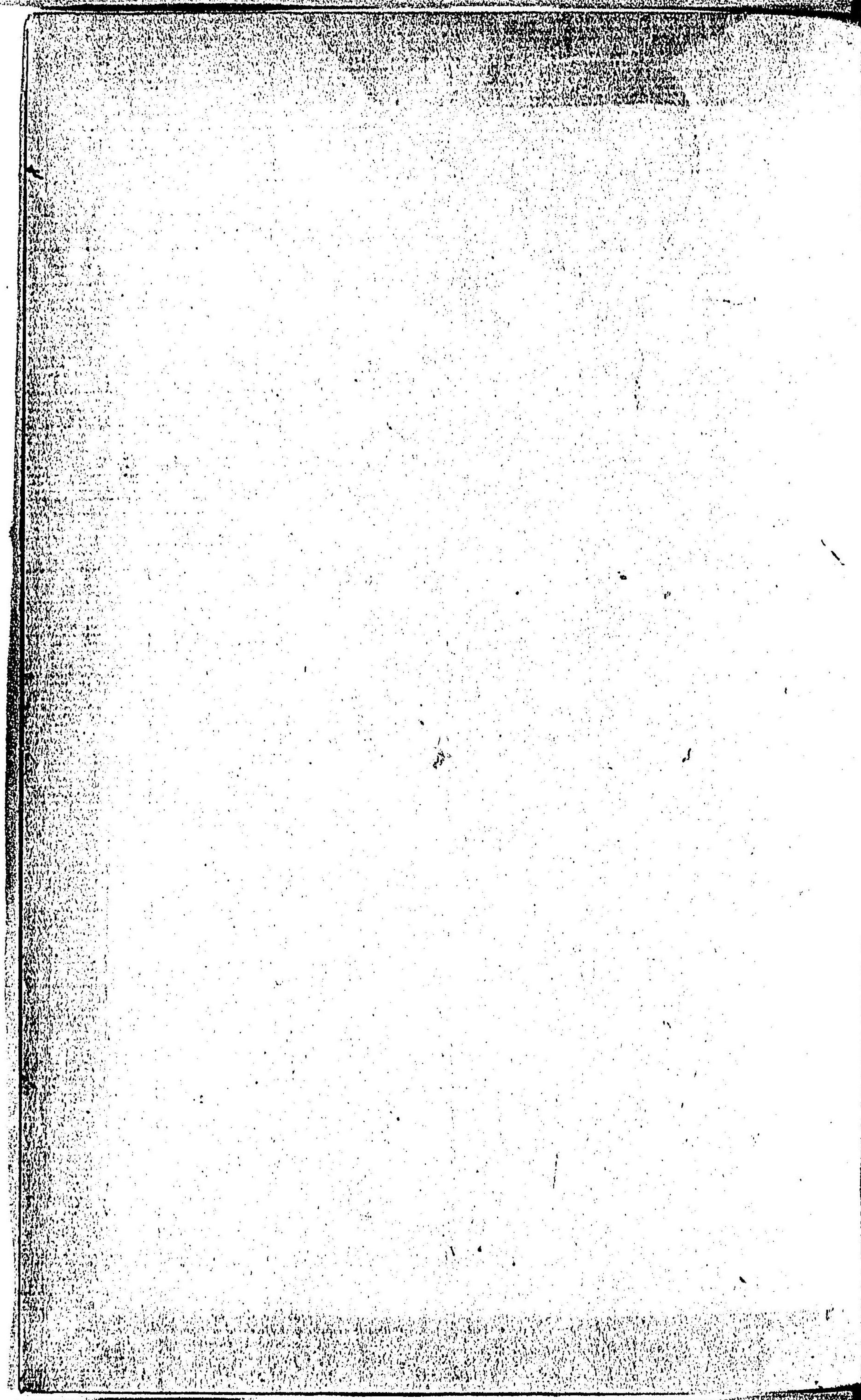
ふ四極山ぶりと云も有るは知
べし山は風俗あるべきは
名れみ出と依難波曲其餘もみふ推量也抄云し今俗の
歌哥ふも其哥の詞を取て某節と名くるもの多しま
から書よそ其首此言哉以て篇名せし哥曲此名とせる
例多しまむこは古も今も皇國も外國
もたのびうら同じ心ぞ牙ありなり
那流夜此歌なりハ比那てふ言無きふ夷振と名けしを如
何といふよ書紀よ阿米那流夜の歌也阿麻佐加流比那
都賣能也云歌と二首竝ばる次歌此比那てふ言を取れ
也初句ハ枕詞ある故もさゆむ阿米那流夜の歌も奏ふ
振の彼と全同じき故也樂府ふて一抄部よ收絶て共
夷振を呼しあり其を此歌のみあらば允恭天皇卷よも

夷振之上歌まも夷振之片下と云は也此等の歌よめ比
那てふ言を無きふ然呼ハこれ右の定あ也神樂歌ふ前
張と云は前襟よ衣を染む云く也云ふ歌一曲此名ある
を他の歌をぬかきて十六曲の總名ふあして大前張小
前張と呼字も思ひ合はぬし大前張七首小前張九首此も其と全同
じをや前小云云る如く凡て某振と云むみふ其振
残分む料の假此名ある振ふ同じ歌あらむふは幾
首よても合せて一名を呼むこ也本と也然るはきわさ
れ也右此前張も然れ也然るを或説ふ躰製備れるを大
夷曲といふ辺鄙の風情ありや云るハ多し書紀をのみ
見て夷曲字よれみ拘ハゆて古事記あとの他例も考

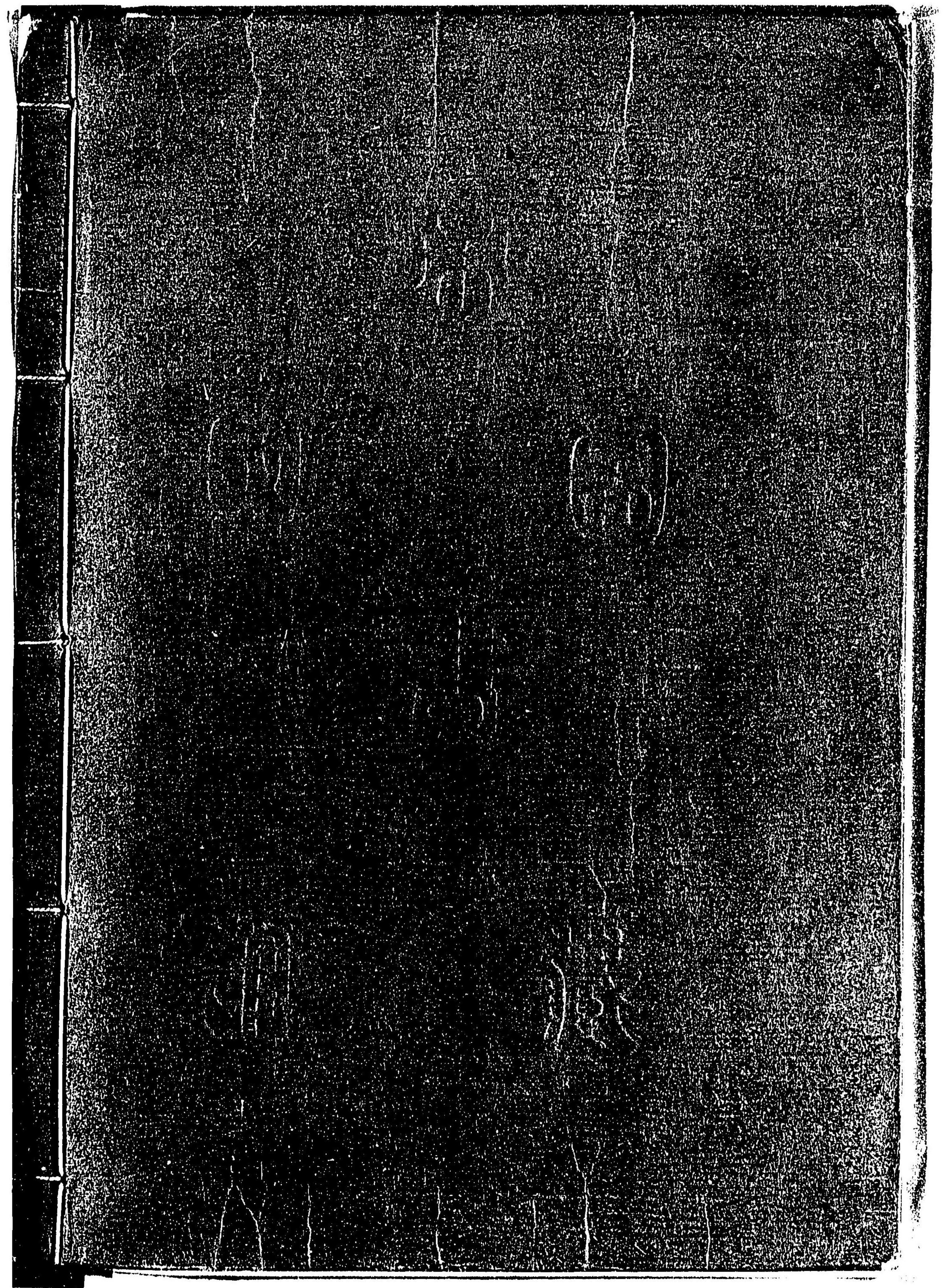
予考、まゝ古意をもあらぬ例の後世心此妄説あるを、世人もみあ然心得居るをいりぞや。ちて一傳ふ。比那都賣能と云歌をも。此時此歌とせゆを誤あゆ。彼歌を別上代此戀歌よて。此ハ更由縁あし。然るを注解ともふ強て此ふ叶牙むとて。さま彼歌を此ふ載あるを。彼ざはよ云るを皆當らぬ説あり。歌を樂府ふて。阿米那流夜此歌と竝べて。共夷振ある故よ。同時の作とせる傳も有しふや。されどそを誤よて。古事記よ。彼哥ハ無きぞ。正しき然れを天在やの歌を。夷振と云を。夷津女の歌ふ引まよは名。比那都賣此歌此ふ載れるは。天在や此歌よ引れて。出とゆ物と心得るときを。万の疑ハ晴ぬばし。今云師のうばかり季き考を見あがら久老があや彼哥をも下照比賣の哥よせむや解とるを。甚じき

強説あり凡て彼人此日本紀哥解を吾師の解此く於ても言を加ふば。うらや説得られし哥詞をあき手を出して。別よ説あさむと勢とる状よていとあぢき無き説ぞ多うゆ。

○門人羽田野敬雄云ふ。此廿一の卷を板よ彫成て吾が皇道を異邦までも傳牙は布しと勤むハ予が仕奉る。八幡大神の文庫此執事。三河、国、渥美、郡、吉田、驛、小家居る。廣岩敬敏、佐野深寧と。設樂、郡、稻橋の里長。古橋暉兒と小あも。



112
114
111



175
34
///

古史傳

三十一